

# 大分経済同友会 欧州視察報告書

～大分のクリエイティブな地方創生に向けて～

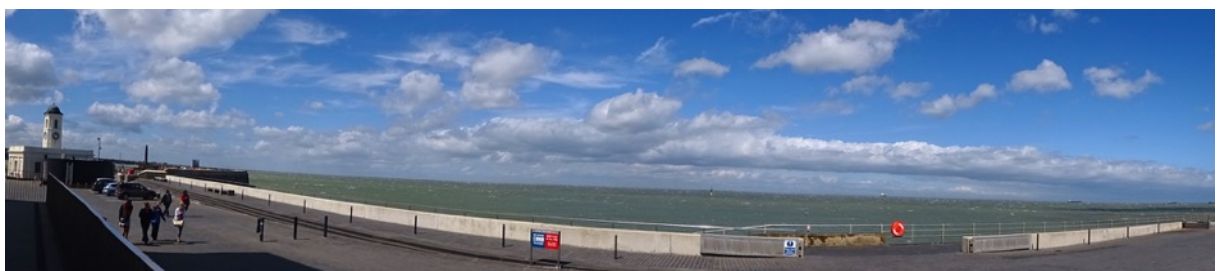


平成28年3月

大分経済同友会

# 目次

はじめに	2
第1章 ロンドン五輪と文化プログラム	3
第2章 英国クリエイティブ経済の活性化	12
第3章 芸術文化を核とした地方創生	21
おわりに	34
参考資料1 視察スケジュール	35
参考資料2 視察参加者名簿	36
参考資料3 主要参考文献	38



# はじめに

大分経済同友会（以下、同友会）は、県都大分における「創造都市（Creative City）」の実現を活動目標に掲げ、調査提言活動を続けてきた。創造都市とは、アートや文化の力を活かして都市の再生や地域経済の振興を図るもので、欧州で先駆けた取り組みが進められた後、世界各地でも同様の取り組みが展開している。同友会としてはこれまで、創造都市に関する国内外の先進事例の調査から、大分への教訓を得て、大分県や大分市への提言に活かしてきた。

また近年では、県内のアートを活かした地域づくりの試みが、大分市や別府市など都市部に限らず、国東半島や竹田市にも拡大しており、同友会ではこうした動きも捉えて2014年4月、県全域を創造都市、創造農村とすることを目指す「クリエイティブ大分（創造県 大分）」を提唱した。県では、こうした提言も踏まえて「芸術文化ゾーンを活用した新たな展開研究会（以下、研究会）」を設置。同友会メンバー、アートNPO代表、学識経験者などを交えた議論を行い、その成果を「「そうぞう県おおいた」の実現に向けて」としてとりまとめた。

一方、政府の文化政策でも、芸術文化の創造性を地域経済の活性化に役立てる創造都市の方向性が強く打ち出されており、同友会の提言活動は国の方向性とも軌を一にしている。但し、そうした全国的状況の中で大分として個性を打ち出そうとすれば、先進事例の模倣ではなく、それらの事例から創造都市の本質を抽出したうえで、大分としての独創的な展開につなげる工夫が必要である。そのためには、国内外の創造都市の取り組みに対する見識をさらに深めていくことが求められよう。

また政府では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京五輪）が東京一極集中の加速に帰結しないよう、開催年の2020年に向けて、全国各地で文化の祭典（文化プログラム）を催し、国内外から地方への集客を図ることを掲げている。これは、ロンドン五輪に向けて英国全土で展開した「文化オリンピック（Cultural Olympiad）」をモデルとした取り組みである。

行政から一歩独立した立場で民間の芸術文化の振興を図る、アーツカウンシルの設立も国の文化政策の大きなテーマとなっており、東京都、沖縄県などで先行した動きがある。アーツカウンシルは、第二次大戦後の英国で経済学者ケインズが提唱して設立されたのが嚆矢とされ、文化オリンピックを実現するうえでも大きな役割を果たした。大分県においても、研究会が大分版アーツカウンシルの設立を提言したところである。

ちなみに、芸術文化とスポーツの地域経済活性化への活用は、政府の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の施策の柱ともなっており、地方創生の「大分モデル」を構想するうえで、本件視察は重要な役割を果たすものと期待される。目的ごとに整理した本件視察の内容は、次のとおりである。

## （1）東京五輪に向けた、英国の文化政策のあり方についての調査研究

- ・ ロンドン五輪および文化オリンピックについての視察を行う。
- ・ 文化オリンピックをはじめ、文化政策、創造都市政策を推進するうえで大きな役割を担う英国アーツカウンシルの取り組みを視察する。

## （2）創造性を産業・観光振興に活かす英国のクリエイティブ産業のあり方についての調査研究

- ・ 英国におけるクリエイティブ産業振興の事例として、東ロンドンを中心としたクリエイティブ経済の活性化の状況を視察する。
- ・ 産業・観光振興に貢献しているミュージアムとして、ロンドンのデザイン・ミュージアム、テート・ブリテン、テート・モダンを視察する。

## （3）その他の創造都市の推進を通じた地方創生についての調査研究

- ・ 芸術文化を活かした地方都市再生の事例として、英国南東部の小都市マーゲイトを視察する。
- ・ 欧州文化首都（EUが毎年、圏内の都市を指定して文化イベントを集中開催）の成功事例として知られるフランスの都市リールと、近隣都市のランス（Lens）に開館したルーヴル美術館の分館を視察する。
- ・ ブローニュの森に新たに開館し、パリ観光の新たな目玉となったフォンダシオン・ルイ・ヴィトン（ルイ・ヴィトン財団美術館）を視察する。
- ・ 食文化や歴史をはじめとする豊富な文化資源で観光客を魅了する世界遺産の街ランス（Reims）を視察する。

なお、今回の視察にあたり、ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長の湯浅真奈美氏には、事前勉強会の講師を務めていただくとともに、現地視察にも参加をいただくなどたいへんお世話になった。記して感謝したい。

# 第1章 ロンドン五輪と文化プログラム

## 1. ロンドン五輪とそのレガシー

「レガシー (Legacy)」という言葉が、近年の五輪でたいへん重視されるようになってきている。一般に「遺産」と訳される言葉だが、世界遺産などに用いられる「ヘリテージ (Heritage)」が過去から継承した遺産を意味するのに対し、「レガシー」は未来へ受け継いでいくべき財産を指す。すなわち、五輪のレガシーとは、五輪が会期中にとどまらず、開催都市・開催国に長期的・持続的にもたらす効果のことである。

このレガシー概念は、2012年に開催されたロンドン五輪から特に注目されるようになった。この年の五輪開催都市が、当初優勢と伝えられたパリではなくロンドンに決まったのも、レガシーに関する提案が優れていたのが一因といわれる。ロンドン五輪が残したこのレガシーは、主にハード面とソフト面から捉えることができる。

ハード面では、低所得者や移民が多く居住し、治安が悪く、インフラ整備も遅れていた東ロンドンの開発が挙げられる。この地区に、ロンドン五輪のメイン会場となるオリンピック・パークが建設された。

ソフト面のレガシーの代表格としては、文化オリンピックの開催を挙げることができる。ロンドン五輪の主会場は首都ロンドンであり、五輪に参加できるのはアスリートとロンドン市民を中心とした一部観衆に限られ、一般国民の関心を得にくいと予想された。このため英国は、2008年の北京大会が閉幕して以降、全土で大規模な文化プログラムを展開し、それらの行事への国民の広範な参加を通じて、五輪への参加意識を涵養した。この取り組みは、文化振興だけではなく、観光・地域振興、市民活動の活性化にも寄与し、ロンドン五輪の大きなレガシーになったとされる。

このため今回の視察では、オリンピック・パークの視察を行うとともに、文化プログラムの推進に大きな役割を果たしたアーツカウンシル・イングランドなどへのヒアリングを行い、ロンドン五輪におけるハード、ソフト両面のレガシーを調査した。

## 2. オリンピック・パーク

クイーン・エリザベス・オリンピック・パークは、大ロンドン市<sup>1</sup>東部に位置する4つのロンドン特別区にまたがるエリアに建設された。視察では、そのうちのニューアム・ロンドン特別区の区役所を訪れ、ジョン・カウ氏、スー・マイナーズ氏から話を伺った。以下では、両氏からの説明に、文献調査の結果を交えて報告する。

### (1) オリンピック・パークの開発

ニューアム・ロンドン特別区の人口は約30万人であるが、住民は多様な民族から構成され、区内で話される言語は実に200を超える。ニューアムは低所得者層の居住する貧困エリアであり、この地区の再生を行うことがオリンピック・パーク整備の大きな目的であった。同時に、ロンドン全体が金融経済の拠点として活況を呈し、住宅の不足と価格高騰に直面する中、パーク整備を機に新規住宅を供給することも重視された。ニューアムは現在、新しいビル建設や新規店舗の開店など投資が進み、ロンドンでも最も勢いのあるエリアとなっている。

オリンピック・パークの面積は約250haで、その中にオリンピック・スタジアム、自転車競技場、水泳競技場、バスケットボール場、ハンドボール場、カヌースラローム場、プレスセンター、選手村などが建設された。

ロンドン五輪を実施するために特別に設けられた組織として、ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 (London Organising Committee of the Olympic and Paralympic Games=LOCOG) とオリンピック施設整備庁 (Olympic Delivery Authority=ODA) がある。LOCOGは大会運営の計画・実施を担う組織で、東京五輪に向けても東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 (TOCOG) が設立されたように、五輪開催には不可欠な存在である。

後者については少し説明が必要だろう。ODAはロンドン五輪の競技施設、関連インフラの整備を一元的に担

<sup>1</sup> 大ロンドン市 (Greater London) は、シティ・オブ・ロンドンと32のロンドン特別区 (London borough) から構成される首都ロンドン最大の行政単位であり、総人口は約8百万人。地方自治体として大ロンドン庁 (Greater London Authority=GLA) が置かれている。

うべく、国と大ロンドン市が共同で設立した公的機関であり、東京五輪でこれに直接対応する組織はないようだ。競技会場や交通機関の整備・運営から、ボランティア・マネジメント、セキュリティ確保、情報共有まで幅広い業務をカバーし、ロンドン五輪をスケジュールどおりスムーズに運営するうえで ODA が果たした役割は大きい。

オリンピック・パークの実際の管理運営は主に、国、大ロンドン庁、ニューアム区役所、ODA の 4 つのレベルであった。また、パークが複数の特別区にまたがることから、ニューアムとしては近隣区との密接な連携も必要とされた。



クイーン・エリザベス・オリンピック・パークの面積は約 250ha。パーク用地は、1950 年に閉鎖された鉄道跡地がそのまま工場や廃棄物置場となったエリアで、大規模な除染を施して整備された。



オリンピック・パークのあるニューアム・ロンドン特別区は、現在、新しいビル建設など投資が進み、ロンドンでも最も勢いのあるエリアとなっている。



ニューアム・ロンドン特別区の区役所でヒアリングを行った。

## (2) サステナビリティの重視

オリンピック・パーク整備に際しては、サステナビリティ（持続可能性）の確保が重要であった。パーク用地は、1950 年に閉鎖された鉄道跡地がそのまま工場や廃棄物置場となったエリアで、土壌汚染が深刻であり、大規模な除染を施したうえで敷地の 4 割強が緑地として整備された。

インフラ整備にあたっては、五輪に適していること、五輪閉幕後もレガシーとして再利用できること、建設方法や建設資材も持続可能なものを用いることがポイントであった。例えばオリンピック・スタジアムは、五輪開催時は 8 万人収容であったが、閉幕後に上層スタンド部分を撤去して 5.5 万人収容にダウンサイジングされた。ザハ・ハディドの設計した水泳競技場「アクアティクス・センター」も、大会期間中は巨大な 2 つのウィング（翼）が暫定的に設けられ 17,500 人の収容能力があったが、五輪閉幕後にウィングは撤去されて収容能力は 2,500 人まで縮小され、現在の美しい形状になっている。この他に、パーク内に架かる橋も、開催中は幅を広く取っていたが、設計時の工夫により現在は幅を縮小する工事を行っている。また、五輪開催 3 年前から植林を行っており、建設中に出た残土をそこに用いてパーク内での再利用を図っている。

## (3) 地域コミュニティへの波及効果

ニューアムとしては、ロンドンが五輪の開催都市となったことで、地域への投資の促進や、市民生活の向上といった効果が生まれることが重要であった。五輪に向けてニューアムが最優先した事項は二つあり、一つ目は五輪の実施に協力すること、二つ目は五輪開催中に住民の生活とビジネスに支障をきたさず、かつ市民が開催後の恩恵を受けられるということであった。

ニューアムは国内でも貧困に苦しんできた地域であり、ロンドン五輪を開催するうえでは、これが地域住民参加型の大会となることが求められた。このためニューアム住民の多くに、ボランティアとして参加してもらった。地元住民が担当した業務には、ボランティアに対するトレーニングやユニフォーム支給など、ボランティア活動者に対するサポート業務も含まれる。ボランティアとなった住民は、五輪のリハーサル・イベントに参加するといった特別な体験も享受できた。

ボランティアを経験した住民の中には、今まで職に就いたことのない人々もいた。このため、ボランティア参加は、彼らが初めて仕事を体験する貴重なステップともなった。こうした業務を担当した人々には、その後、就職することができたり、現在も地域のイベントなどでボランティア活動を続けるといった効果が生まれている。

五輪の入場チケットは枚数が限られ、入手できない人々も大勢いたので、ニューアムでは大型スクリーン 2 台を会場近くに設置して、彼らが臨場感をもって試合を観戦できるようにした。また、直前に売れ残ったチケットを区長が買い取り、住民に転売するといった取り組みも行った。

#### (4) ビジネスへの波及効果

ロンドン五輪がもたらした経済波及効果のうち、主にニューアムに関連したものは次のとおりである。

オリンピック・パークに隣接するストラトフォード・シティ地区にはもともと再開発の計画があったが、五輪開催決定により工期が早まり、欧州最大の都市型ショッピングモール、ウェストフィールド・ストラトフォード・シティが 2011 年に開業した。オーストラリアの不動産開発業者・小売業者であるウェストフィールド・グループが開発した施設で、巨大な商業施設に加え、ホテル 3 軒、ボーリング場などが入る大型複合ショッピングモールである。最寄り駅としては、英仏海峡トンネルで大陸ヨーロッパとつながるユーロスターの停車駅、ストラトフォード国際駅が 2009 年に開業している。他にも区内では、シーメンスのイノベーション・センターやマンションなど、多額の建設投資が相次いだ。パークのエリア外になるが、2000 年に開業したコンベンション施設「エクセル展覧会センター」では、11 種目の競技が開催された。ニューアム区内に建設された選手村は、五輪閉幕後に 2,800 戸のマンション、アパートにリノベーションされた。

ロンドン東部のストラトフォード駅と西部のヒースロー空港を結ぶ鉄道路線クロスレールも、五輪開催のおかげで当初予定より早く建設が進み、ストラトフォード駅からシティまで 7 分、ボンズストリートまで 20 分と、ロンドンの他エリアへのアクセスが格段に向上する見通しである。

五輪の開催と、市民生活やビジネスの双方に悪影響が出ないよう、ゴミ収集や清掃は夜間に行われた。大型スーパーのウェストフィールドも、物資搬入を夜間に行うなど、五輪運営に支障がないように協力した。夜間の搬入作業には不便な面もあるが、一方で道路の交通量が少ないという利点もあり、他の地域でも夜間搬入が実施されるなど、五輪時に導入された仕組みが続いているケースもある。

ロンドン五輪がニューアムにもたらしたレガシーとしては、ニューアムの知名度の向上や、五輪開催が住民の誇り・自信となって閉幕後も継続していること、五輪を契機に外資を含む地域への投資が増加していることなどが挙げられる。



オリンピックスタジアムは 8 万人収容の規模だったが、閉幕後 5.5 万人規模にダウンサイジングされ 2015 年ラグビーワールドカップで使用 2016 年よりサッカー ウェストハム・ユナイテッドのホームスタジアムとして使用する 五輪閉幕後もレガシーとして再利用される



ザハ・ハディドの設計した水泳競技場「アクアティクス・センター」は素晴らしい造形美を誇る大会期間中は巨大な 2 つのウィング（翼）が暫定的に設けられ 17,500 人の収容能力があったが、五輪閉幕後にウィングは撤去されて収容能力は 2,500 人まで縮小され、現在の美しい形状になっている



アニッシュ・カプーアのパブリック・アート作品「アルセロール・ミッタル・オービット」、高さ 115 メートルの展望塔で視察時は改修工事中で、2016 年春に世界最大のヘルター・スケルター（螺旋型の滑り台）としてオープンする パーク内施設は常にレガシーしている

ヘルター・スケルター（螺旋型の滑り台）の案内アルセロール・ミッタル・オービット公式サイトより <http://arcelormittalorbit.com>



2000年1月1日にオープンしたミレニアムドームは人気がなく一時閉鎖されたが、大規模娯楽施設The02として再開業、ロンドン五輪では体操やバスケットボール、トランポリン競技で利用された



オリンピック・パークに隣接するストラトフォード・シティ地区は再開発が進む  
欧州最大の都市型ショッピングモール、ウェストフィールド・ストラトフォード・シティが2011年に開業した



## (5) ラグビー・ワールドカップ

ロンドン五輪の施設・インフラ整備に采配を振った ODA は、大会閉幕後に速やかに解散し、オリンピック・パークの再利用・開発に関する業務はロンドン・レガシー開発公社 (London Legacy Development Corporation = LLDC) <sup>2</sup>に受け継がれた。LLDC は、大ロンドン市が 2012 年 4 月に設立した団体であり、ロンドン市長が理事長を務める。

パーク内の施設のうち、オリンピック・スタジアムは現在、E20 スタジアム LLP が所有している。スタジアムのリニューアルを監督する組織として、LLDC とニューアム区役所が 2013 年 3 月に設立したジョイントベンチャーである。スタジアム運営の実際のオペレーションは、フランス企業のヴィンチ社 (VINCI) に委ねられている。建設やコンセッション<sup>3</sup>を主業とするヴィンチ社は、2015 年から 25 年間にわたりオペレーションを行うことになっている。

オリンピック・スタジアムは、2015 年 9 月にロンドンで開催されるラグビー・ワールドカップ (以下、ラグビー WC) の会場として活用され、計 5 試合が行われる。現在、ニューアム区役所のラグビー WC 担当者は 6 人で、このうちマイナーズ氏はイベント部門のヘッドを務めている。

ニューアムでは、2015~17 年までの間、スタジアム隣接地にファンゾーンを設置する。ファンゾーンは五輪の際にも設けられたが、当時はパーク内ではなく、東ロンドンの交通のハブであるストラトフォードに整備された。今回のファンゾーンはアルセロール・ミッタル・オービット<sup>4</sup>とオリンピック・スタジアムの狭間に設けられ、1 万人を収容できる。ロンドンの秋は雨がよく降るが、ファンゾーンには雨天でも観戦可能な大型スクリーンを設置する。地元のミュージシャンを招いてのライブや、子どもから大人まで楽しめるラグビー関連イベントを催すとともに、バーや屋台なども設けられる。チケットを持っていれば誰でも楽しめる空間となる。試合が行われなくても安価なチケットで入場でき、他会場の試合を観戦できる。また、ラグビー WC のチケットは高価で地域住民はなかなか購入できないので、試合の雰囲気だけでも味わえるよう、住民限定イベントも検討している。

ファンゾーンの設置目的は、大勢の人々に楽しんでもらうという住民の便益が第一であるが、試合後に 6 万人近い観客が一斉に交通機関に流れてしまうことを防ぐ、交通渋滞緩和策の意味合いもある。ファンゾーンのインフラ整備には資金が投入されるが、その投資を回収できるようヴィンチ社がビジネスプランを組んでおり、ニューアムにも利益が跳ね返ってくる仕組みとなっている。

オリンピック・スタジアムは、ラグビー WC 閉幕後の 2016 年より、地元サッカーチームのウェストハム・ユナイテッドが本拠地として 99 年間使用することとなっている。このため WC 閉幕後、改修工事を加えて 2016 年に再オープンする予定である。

<sup>2</sup> 当該事業を担う機関としてはすでに、オリンピック・パーク・レガシー公社 (Olympic Park Legacy Company = OPLC) があったが、LLDC はそれに代わる組織として設立された。

<sup>3</sup> コンセッションとは、公共施設などの運営権を民間事業者へ委ね、施設の効率的・効果的運営を図る事業形態である。

<sup>4</sup> アルセロール・ミッタル・オービット (Arcelor Mittal Orbit) は、アーティストのアニッシュ・カプアがデザインした巨大な五輪のオブジェ。世界最大の鉄鋼メーカー、アルセロール・ミッタルが資金提供を行ったことから、作品に同社の名称が冠された。



ニューアムのフェンゾーンはアルセロール・ミ  
ツタル・オービットとオリンピック・スタジア  
ムの狭間に設けられ、1万人を収容できる  
<http://www.newhamrecorder.co.uk> より



ラグビーワールドカップ 2015 イギリス大会ではファ  
ンゾーンが全国 15 個所で開催され 10 万人が楽しんだ  
<http://www.englandrugby.com> より



ニューアム区役所でラグビーワールド  
カップについてヒアリングを行った

### 3. 文化オリンピック

ロンドン五輪における文化オリンピックの取り組みとそのレガシーについて、キングス・カレッジ・ロンドンの文化部門「カルチャー・アット・キングス (Culture at King's)」のウルリカ・ホグバーク氏から説明を受けた。ホグバーク氏はロンドン五輪当時、レガシー・トラスト UK (Legacy Trust UK) のプログラム・ディレクターを務めていた。レガシー・トラストはロンドン五輪に向けた地域活性化を支援する時限設置型の非営利団体として 2007 年に設立され、特にスポーツや文化のレガシーに着目して文化オリンピックの実施をサポートする機関であった。また、同氏が現在勤めるカルチャー・アット・キングスは、高等教育機関と文化セクターの連携を活性化するために 2012 年に学内に設立された組織である。

以下では、同氏のレクチャーならびに太下 2015 などに基づき、文化オリンピックの概要を説明したい。

#### (1) ロンドン五輪における文化プログラムの概要

五輪は一般的にスポーツの祭典と解されがちだが、IOC のオリンピック憲章に明記されているように、実は芸術文化の振興も重要なテーマで、これが「文化プログラム」と呼ばれるものである。五輪における文化プログラムの側面は一時期弱まったが、1992 年のバルセロナ大会から多彩な文化イベントが再び行われるようになり、2012 年のロンドン大会では「文化オリンピック」の名のもと、かつてないほどの規模で実施された。

太下 2015 によれば、ロンドン五輪における文化プログラムの特徴は、次の 3 点である。

- ・ 従来の五輪大会はあくまでスポーツが中心であったのに対して、ロンドン大会では、もうひとつの中核として「文化」という概念を明確に提示したこと
- ・ スポーツ競技についてはロンドンにほぼ集中していたものの、文化プログラムに関しては英国全土で開催されたこと
- ・ 文化プログラムの件数や事業費、参加者数等、規模(量)の面から見ても、文化プログラムの多様性や内容等に代表される質の面から見ても、ともに過去の五輪大会には見られない、圧倒的な水準であったこと

文化オリンピックは、ロンドン大会の前の北京大会が閉幕した後に英国各地でスタートし、4年間で活動 17.7 万件、参加者 4 千 4 百万人、参加アーティスト 4 万人という実績を残した。特に、ロンドン大会のフィナーレを飾った「ロンドン 2012 フェスティバル」は、2012 年 6 月 21 日～9 月 9 日の 12 週間にわたって英国各地で開催され、この期間だけで活動 3.4 万件、参加者 2 千万人、参加アーティスト 2.5 万人を記録した。英国のこうした取り組みに触発され、わが国でも東京五輪に向けて文化プログラムを、活動 20 万件、参加者 5 千万人、参加アーティスト 5 万人を目標に実施していく計画である。

#### ロンドン五輪と東京五輪における文化プログラムの比較

項目	ロンドン五輪 文化プログラム (実績)	東京五輪 文化プログラム (目標)
活動数	177,717 件	200,000 件
参加者	4,430 万人	5,000 万人
アーティスト	40,464 人	50,000 人
事業費	1 億 2,662 万ポンド	—

(出典) 太下 2015、文化庁 2015b より作成



文化プログラムのレガシーとしては、文化プログラムを体験した国民の文化活動への参加意欲が高まったこと、関係者の間で新たなネットワークが構築されるとともに、R&D（研究開発、革新）の必要性への理解が進んだことなどが挙げられる。

ロンドン五輪の文化オリンピックは、地域ごとに多彩な内容ではあるものの、オール英国という一つのブランドで開催したことに意義があったという。また、一番重要であるのは「市民の体験」であり、自分の住む街にいながらにして、五輪という大きな大会・イベントに参加できたというワクワク感を得られたことが貴重であった。

## （２）多彩な文化プログラム

以下では、ロンドン五輪に向けて開催された多種多様な文化プログラムの一端を紹介する。

「平和のキャンプ (Peace Camp)」は、英国内の 8 ヶ所のビーチにテントを並べ、内部に光を灯すビジュアル・アートを展開すると同時に、テントの中で平和にまつわる詩や音楽を流した。

「ビッグコンサート (Big Concert)」は、ロンドン 2012 フェスティバルのオープニング・イベントとして開催。スコットランドの荒廃した地区で、グスタボ・ドゥダメル指揮により演奏された野外コンサートである。

エジンバラを舞台とした「光速 (Speed of Light)」は、ライトが点灯するスーツを着た人々が、歩いたり走ったりすることで光の軌跡が描かれる作品。アート×スポーツ×テクノロジーの融合であり、地域住民も参加した。

ベルファストの「巨人の大地 (Land of Giants)」は、北アイルランドの巨人伝説を踏まえたショーである。これを実施したことは、地域の文化セクターにとって大きな自信となったという。英国は 2009 年に、欧州文化首都を参考に「英国文化都市 (UK City of Culture)」を 4 年に一度選出することを決定したが、その第 1 回に北アイルランドの都市デリー／ロンドンデリーが立候補し、五輪翌年の 2013 年に選出された。これは、五輪がもたらした大きなレガシーだといえる。

バーミンガムの「旅 (The Voyage)」は、屋外で実施されたパフォーマンスである。まちなかで大きなプロジェクトを行うことで、市民が今までと違う目で街を発見するよい機会となった。その後、バーミンガムでは 2014 年に図書館がオープンしている。

「若者のための若者によるテート・ムービー (Tate Movie – for and by young people)」は、国立美術館ネットワークのテートが手がけた文化プログラムである。「ウォレスとグルミット」で有名なアードマン・アニメーションズと連携し、英国の子ども 3 万人でアニメを制作した。世界一大勢の人でつくった作品としてギネスにも登録され、子どもたちが自信を高める機会となった。このプログラムを実施するために、アードマンとテートは一緒になって、バンで英国中を駆け巡ったという。

「どこかで (Somewhereto)」は、クリエイティブなアイデアを持つ若者にそれを実現するチャンスを与え、彼らをインスパイアするプロジェクト。若者がやりたいことや夢を実現できるよう、さまざまな施設を開放した。例えば、首相官邸でダンスを踊らせるなど「一生で一度 (one thing life time)」の体験をさせるのが、この文化プログラムのモットーであった。

「ブレイズ (Blaze)」は、若者にキュレーター体験をさせる企画であり、大物アーティストの作品制作から発表までを彼らにキュレーションさせた。

「風船ストーンヘンジ (Inflatable Stonehenge)」は、ジェレミー・デラーによる実物大のストーンヘンジの風船で、トランポリンとして遊ぶことができる。文化遺産のストーンヘンジを対象に、新しい体験ができるというプロジェクトで、当初は国内数ヶ所を回るだけの予定が、たいへんな人気を博して英国中を巡回し、ロンドン五輪閉幕後には海外まで巡回するレガシーとなった。

「アンリミテッド (Unlimited)」は、障がいのあるアーティストの創造性あふれる活動を支援するプログラムで、①障がいのあるアーティストによる作品制作のための資金助成・制作委託、②制作に必要な専門技能の育成、③作品の上演・展示、④アーティストの国際進出、国際的な協働の促進を行った。アンリミテッドから生まれた作品は、「ロンドン 2012 フェスティバル」で披露されるとともに、パラリンピックに合わせてサウスバンク・センターで開催された「アンリミテッド・フェスティバル」でも実演された。この取り組みを通じて、障がいを持つアーティストの活動がかつてない規模で国内外に紹介され、認知度の向上と活躍の場の拡大に貢献した。アンリミテッドの活動は、ロンドン五輪閉幕後もシェイプとアーツアドミンという二つのアート団体を核に継続されている。



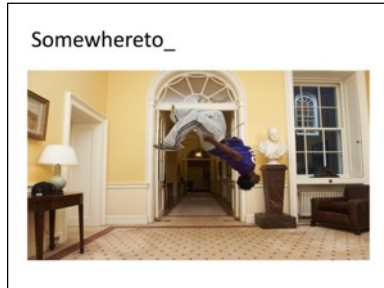
スコットランドの荒廃した地区で、グスタボ・ドゥダメル指揮により演奏された野外コンサート



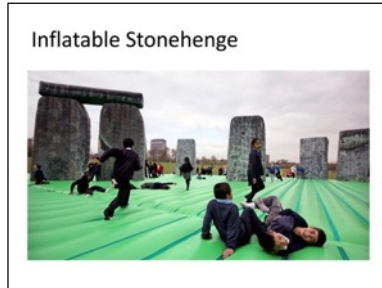
ベルファストで北アイルランドの巨人伝説を踏まえたショーを行い地域の自信をつけ「英国文化都市 (UK City of Culture)」に選定



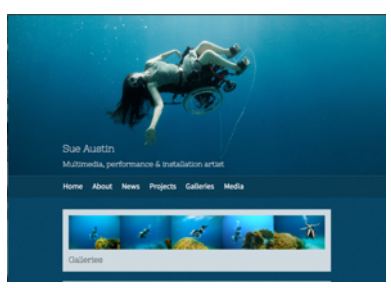
エジンバラ、ライトが点灯するスーツを着た人々が、歩いたり走ったりすることで光の軌跡が描かれるアート×スポーツ×テクノロジーの融合作品



若者がやりたいことや夢を実現できるよう、さまざまな施設を開放した 写真は首相官邸でダンスを踊る



たいへんな人気を博して英国中を巡回した、実物大のストーンヘンジの風船で、トランポリンとして遊ぶことができる作品



「アンリミテッド (Unlimited)」障がいのあるアーティストの創造性あふれる活動を支援するプログラムが英国全土で実施された <http://www.wearfreewheeling.org.uk/sue-austin-home> より

### (3) ラグビー・ワールドカップと文化プログラム

ロンドンで2015年9月に行われるラグビーWCでは、文化プログラムをロンドン五輪ほどのスケールで行うことは予定されていないという。しかしながら、最近になってWC組織委員会内から文化プログラムを増やすべきとの意見が出ているようだ。キングス・カレッジ・ロンドンが行った市民アンケート調査でも、50%以上の人々が文化プログラムの実施を希望しているという結果になった。英国のこうした実態を踏まえて、先方からわが国と大分に向けて次のようなエールが送られた。

「日本では、2020年東京五輪の前年にラグビーWCが開催される。それならば、五輪だけではなくラグビーWCにおいても文化プログラムを行うことで、スポーツと文化のイベントのマッチングを通じ、双方向で新たな観客層を拡大できる可能性がある。スポーツ・イベントと合わせて開催することで、文化プログラムのスケールがアップすることも大きなポイントである」

## 3. アーツカウンシル

英国には、アーツカウンシル・イングランド、アーツカウンシル・ウェールズ、クリエイティブ・スコットランド<sup>5</sup>、アーツカウンシル・北アイルランドの4つのアーツカウンシルが存在している。

今回の視察では、これらのアーツカウンシルのうち最も大きく、ロンドンに本部を構えるアーツカウンシル・イングランドのニック・マクドウェル氏、ニコラ・スミス氏から、アーツカウンシルの沿革やロンドン五輪で担った役割を中心にレクチャーを受けた。マクドウェル氏は、2015年3月に東京で開催されたブリティッシュ・カウンシル、文化庁主催のフォーラム「カルチュラル・オリンピアード - 日本から世界へ、全国規模の文化プログラム開催に向けて」にもスピーカーの一人として出席している。

以下では両氏のレクチャーに、吉本2015、太下2015なども交えて、アーツカウンシルの概要を整理する。

### (1) 英国のアーツカウンシルについて

<sup>5</sup> クリエイティブ・スコットランドは、スコットランドの芸術文化産業の振興・支援を行うべく、アーツカウンシル・スコットランドとスコットランド映画協会が2010年に統合した組織である。

英国のアーツカウンシルは、第二次大戦後の1946年に大英アーツカウンシル（Arts Council of Great Britain =ACGB）として発足した。初代会長となった経済学者 J・M・ケインズは、ナチスドイツによる芸術文化の政治利用への反省を踏まえ、芸術文化への支援は政府から一定の距離を置くべきだという「アームズ・レングスの法則」を提唱した。すなわちアーツカウンシルは、資金調達面では政府からの助成を原資としつつ、芸術文化の支援に際しては独立した権限を持つ機関である。

ACGBは全国組織であったが、北アイルランドについてはACGBとは別途、アーツカウンシル・北アイルランドが1962年に設立されている。また、ACGBは1994年に、イングランド、ウェールズ、スコットランドの3地域に分割されたため、北アイルランドを含む4つのアーツカウンシルが国内をカバーする体制となった。このときアーツカウンシルの財源として、従来の政府助成（Grant-in-Aid=GIA）に加えて、自主財源として国営宝くじの収益金が加わった。

アーツカウンシル・イングランド（Arts Council England=ACE）の場合、2009年度における総収入が6億400万ポンドで、その主な内訳は政府助成金4億5,300万ポンド、宝くじ基金1億7,200万ポンドである。助成プログラムとしては、英国の代表的な文化機関・施設に対する非公募の継続的助成（Regular Funding）と、さまざまな文化事業を対象とする公募型助成（Grants for the Arts）の2種類があった。

## （2）政権交代にともなうアーツカウンシルの予算削減

2010年に英国の政権が労働党から保守党・自由民主党連立政権へと交代し、新政権は財政難の中で予算削減の方針を打ち出した。ACEについても2014年度までに予算を29.6%削減することとなった。実際、2011年度の政府助成金は3億9,300万ポンドで、2009年度対比で13%の減少となった。

また、継続的な助成は、2011年度からナショナル・ポートフォリオ助成金（National Portfolio Funding=NPF）という全国戦略に基づく助成制度に改められ、ACEの全ての助成金が公募・審査のプロセスを経ることとなった。ACEはこうした中、2010年に今後10年間の戦略フレーム「全ての人々にすばらしい芸術を（Achieving Great Art for Everyone）」を策定し、組織のミッションやビジョンを明確化した戦略的運営に努めている。この戦略フレームは、2013年に「全ての人々にすばらしい芸術文化を（Great Art and Culture for Everyone）」に改訂された。この中には、5つの目標が掲げられている。

- ・ 卓越性の促進（promoting excellence）：芸術文化・ミュージアム・図書館が卓越したものとなる。
- ・ より広範なアクセスの創出（creating wider access）：全ての人々が芸術文化・ミュージアム・図書館を体験する機会を持ち、それらによって鼓舞（inspire）される。
- ・ 回復力の確立（building resilience）：芸術文化・ミュージアム・図書館が回復力に富み、環境的に持続可能なものとなる。
- ・ スキルと多様性の奨励（encouraging skills and diversity）：芸術文化・ミュージアム・図書館におけるリーダーと働き手が、多様性に富み、適切なスキルを身につける。
- ・ 子どもと若者の参加（engaging children and young people）：全ての子どもと若者が、芸術文化・ミュージアム・図書館の豊かさを体験する機会を得る。

その後のACEの事業内容を見ると、NPF、公募型助成に、ACEが独自戦略に基づき実施する戦略的助成（Strategic Funding）が加わり、これらが助成制度の三本柱となっている。戦略的助成は、国内で芸術文化の水準が低い地域に重点的に投資するプログラムである。

2013年度の助成額を見るに、NPFが3億1,100万ポンド、戦略的助成1億1,900万ポンド、公募型助成7,000万ポンドとなっている。その財源となる総収入は、6億9,500万ポンド（政府助成金4億5,000万ポンド、宝くじ基金2億3,100万ポンド）であり、2011年度に比べて見かけ上は増加に転じている。しかしながらその実態を見ると、ミュージアムや図書館への政府からの資金提供（助成額4,600万ポンド）がACEを経由して行われるようになったこと、音楽教育（Music Education Hubs）のための予算（助成額6,300万ポンド）が教育省から与えられるようになったことが大きく、戦略的助成、公募型助成も宝くじ基金からの収入が増えたことから増加しているが、NPFなどの従来型事業に充当される政府予算は削減が続いているという。ACEの総職員数も、2011年度の560人から2013年度には420人に削減されており、組織の管理運営コストの削減を図りながら、芸術文化団体への助成額の削減をできるだけ抑えようと努めている。このように予算が減少する中で、ミュージアムや図書館、音楽教育などに対してACEが果たす役割・責任はむしろ増えているという。

ちなみにNPFの助成対象となった諸団体の総収入の内訳を見ると、NPFが占める割合は27%であり、その他は自己収入（チケット販売など）52%、寄付金収入（寄付金など）12%、その他公的ファンド（自治体など）9%となっている。

ACEの支援では、過去には施設建設に対する投資も行われており、オリンピック・パークの一部にもそうした文化・教育目的の施設が建設されており、これはロンドン五輪のレガシーといえる。しかし、大規模な公的投資はロンドンなど大都市に投入されがちのため、ACEとしては今後、ロンドン以外の地方圏により重点的に投資を行っていく方針であるという。

### (3) 文化オリンピックにおけるアーツカウンシル・イングランドの役割

ロンドン五輪に向けた大規模かつ全国的な文化プログラムの実施において、ACEが果たした役割は大きい。ACEは自らのミッション「全ての人々にすばらしい芸術文化を」を、文化オリンピックの推進を通じて実現しようとしたのだ。その際に目標としたのが、①若い世代と市民の参加拡大、②芸術文化の価値を一般民間に広めること、③芸術文化セクターと他のセクターの出会いである。

このためACEは、文化プログラムに対する重要な資金提供者となった。文化オリンピックの総予算は1億2,700万ポンドであり、そのうち3,600万ポンド(29%)をACEが負担した。その他に、組織委員会が3,400万ポンド、レガシー・トラストUKが3,600万ポンド、大ロンドン庁が500万ポンドを負担している。

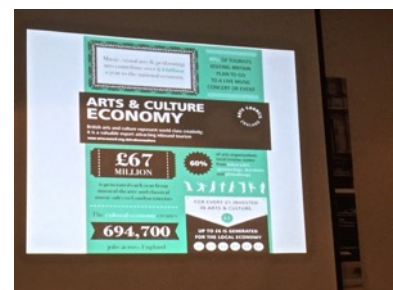
また、五輪でロンドンだけが盛り上がるのではなく、地方都市の活性化にもつながるよう、ACEは文化プログラムの責任者として英国各地に13人のクリエイティブ・プログラマーを配置した。さらにロンドン五輪では、草の根レベルの非営利の文化プロジェクト、イベントを五輪文化プログラムとして認定するインスパイア・マーク認定事業という仕組みがあり、これが文化オリンピックの全国展開に大きく貢献したが、その実質的な認定作業にあたったのが、各地のクリエイティブ・プログラマーであったという。



ブリテッシュ・カウンシルの本部



アーツカウンシル・イングランドのニック・マクドウェル氏、ニコラ・スミス氏から、アーツカウンシルの沿革やロンドン五輪で担った役割を中心にレクチャーを受けた



アーツカウンシル・イングランドの総収入は、6億9,500万ポンド(政府助成金4億5,000万ポンド、宝くじ基金2億3,100万ポンド)

アーツ・カウンシルの目的は「全ての人々にすばらしい芸術文化を (Great Art and Culture for Everyone)」

## 第2章 英国クリエイティブ経済の活性化

### 1. クリエイティブ経済

#### (1) ブリティッシュ・カウンシル クリエイティブ経済チーム

英国政府が設立した公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシル (British Council=BC) の本部を訪問し、クリエイティブ経済チームのレベッカ・シュースマス氏より、英国クリエイティブ経済の現況についてレクチャーを受けた。アーツカウンシル・イングランドが、文化・メディア・スポーツ省 (Department for Culture, Media and Sport=DCMS) 系の団体であるのに対して、国際文化交流を主目的とする BC は外務省系の団体であり、わが国でいえば国際交流基金に相当する。

BC のクリエイティブ経済チームは、クリエイティブ経済・産業に関する広範な分野を担当している。具体的には、世界各国のクリエイティブ経済・産業が地域の経済や都市の成長に果たす役割について、各国と連携しながら調査していくことなどを主な活動内容としている。チームは世界の約 110 ヶ国を地域別に分担しており、シュースマス氏は、中東・北アフリカ地域と、日本を含む東アジア地域の担当者である。2015 年 2 月にも来日し、創造性とテクノロジー、社会的課題と起業について講演した経験を持つ。

BC は、国を越えて創造的アイデアを連携させていくことで、世界が活性化することを目指している。その活動の中心は、キャパシティ・ビルディング (能力習得、人材育成) である。起業家精神の涵養のため、企業をスタートアップする際のツールキットを整備し、ウェブサイトからもダウンロードできるようにしている。ロシアやナイジェリアなど、必要に応じて地域の特徴に合わせた改訂も加えているようだ。

もう一つの活動の中心は、R&D である。アーティストや社会学者など、さまざまなスキルを持つ人々を国を越えて集め、社会的課題解決のためのアイデアを創出するプロジェクトに取り組んでいる。日本でも、子どもたちの未来のあり方をテーマにアイデア・コンペを行い、事業者を育成する試みを行ったという。

#### (2) クリエイティブ産業の振興

英国はブレア政権のもとで、1997 年にクリエイティブ産業 (Creative Industries) の振興を政策として打ち出した。DCMS は、クリエイティブ産業を「個人の創造性や技術、才能に起源を持ち、知的財産の創造と市場開発を通して財と雇用を生み出す可能性を有する産業群」と定義している。具体的には、①広告、②建築、③美術・骨董品市場、④デザイナーファッション、⑤映画・ビデオ、⑥音楽、⑦舞台芸術、⑧出版、⑨娯楽ソフト、⑩ソフトウェア・コンピュータサービス、⑪テレビ・ラジオ放送、⑫工芸、⑬デザインの 13 の産業分野によって構成される (DCMS 1998, 2001)。

クリエイティブ産業は 1990 年代以降、世界各国でも成長率の高い産業として、成長戦略や雇用創出、輸出拡大の観点から注目を集めた。各国がクリエイティブ産業政策を推進する際には、多くのケースで英国の定義が基本となっている。わが国でも経済産業省は、英国の定義を踏まえつつ、クールジャパン戦略との整合性も念頭に置いて食や観光を加えるといった修正を試みている (野村総合研究所 2011)。わが国の地方自治体がクリエイティブ産業の推進を図る場合も、おおむね英国や経済産業省の定義を参照しているようだ。

しかしながら、今回のレクチャーでシュースマス氏は、従来型のクリエイティブ産業の定義はすでに古くなっており、現在は「創造性強度 (Creative Intensity)」に着目していると語った。狭義のクリエイティブ産業に含まれない既存産業も、その多くは創造性に関わるビジネスであると考えているという。また、クリエイティブ産業は成長戦略という経済的視点からその重要性が語られがちだが、それだけではなく、社会的インパクト (非経済的インパクト) も大きい。クリエイティブ産業は、さまざまな分野へとにじみ出しているというのだ。

わが国が、過去の定義に則ってクリエイティブ産業の振興を図っている間に、英国では定義そのものが更新されていたようだ。このため以下では、DCMS が発表した文献の調査に基づき、英国におけるクリエイティブ産業の定義の変遷を追っていきたい。

#### (3) クリエイティブ産業からクリエイティブ経済へ

まず、DCMS は 2010 年に発表したクリエイティブ産業の統計 (DCMS 2010) で、狭義のクリエイティブ産業からクリエイティブ人材へ概念を拡張し、双方を合わせたものをクリエイティブ経済 (Creative Economy) として定義し、クリエイティブ経済に関する統計データの公表を開始した。それまでは、標準産業分類により指定

された 13 業種をクリエイティブ産業と位置づけ、それらに関する付加価値や雇用者数を算出していたが、クリエイティブ産業以外の産業においても、クリエイティブな人材・雇用は存在し、その規模を捉えることが重要との発想に基づき、標準職業分類により職種を指定して雇用者数を集計したのだ。そして、クリエイティブ産業と、クリエイティブ産業以外の産業におけるクリエイティブ人材・雇用を合わせたものをクリエイティブ経済として定義した。成長力の源泉を、一部のクリエイティブな業種から、全産業におけるクリエイティブな人材の活躍へと拡張したといえる。

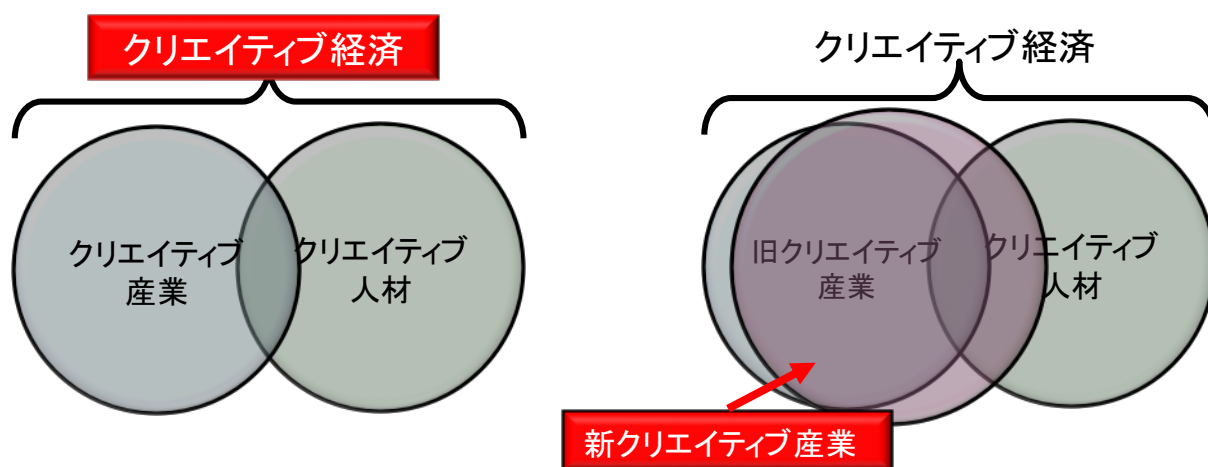
#### (4) 創造性強度に着目したクリエイティブ産業の定義の見直し

こうしてクリエイティブ経済という概念が導入されたが、クリエイティブ産業自体の定義は基本的に従来のままであった。これに対して 2013 年に、クリエイティブ産業の業種を恣意的に指定するのではなく、クリエイティブ人材が多く集積している業種をクリエイティブ産業と位置づけるべきとの検討がなされた (DCMS 2013)。この結果を踏まえて、2014 年公表の統計 (DCMS 2014) から、クリエイティブ産業の定義を改めており、そのときに用いられた概念が創造性強度 (Creative Intensity) である。これは、全従業員に占めるクリエイティブな職種の従業員の割合を指し、この水準がおおむね 2 割以上の産業がクリエイティブ産業として再定義された。

この結果、クリエイティブ産業は現在の定義で、①広告・マーケティング、②建築、③工芸、④デザイン (プロダクト・グラフィック・ファッションデザイン)、⑤映画・テレビ・ビデオ・ラジオ放送・写真、⑥IT・ソフトウェア・コンピュータサービス、⑦出版、⑧美術館・ギャラリー・図書館、⑨音楽・視覚芸術の 9 業種から構成される。産業分野の統廃合もあってかつての 13 分類と対比しにくいだが、具体的には IT 全般、マーケティング、美術館・ギャラリー・図書館などが新たにクリエイティブ産業に追加された。新定義で一部外された業種もあるが、全体的にはクリエイティブ産業の範囲は広がったといえる。

クリエイティブ経済の導入 (2010 年)

創造性強度に基づくクリエイティブ産業の再定義 (2014 年)



クリエイティブ産業、クリエイティブ経済の源泉に、クリエイティブな個人の活躍を見る一連の改訂は、創造性の源泉として人材を重視する、R・フロリダの創造的階層 (Creative Class) 論と摺り合わせを行ったようにも感じられる。

なお、現在の定義に基づくクリエイティブ産業・経済の規模は次のとおりである。

#### 英国クリエイティブ産業・経済の粗付加価値 (GVA)

グループ	2011	2014	成長率
クリエイティブ産業	652 億ポンド	841 億ポンド	29.0%
非クリエイティブ産業の クリエイティブ人材	415 億ポンド	492 億ポンド	18.6%
クリエイティブ経済	1,067 億ポンド	1,333 億ポンド	24.9%
英国全体	1 兆 4,433 億ポンド	1 兆 6,183 億ポンド	12.1%
クリエイティブ経済のシェア	7.39%	8.24%	

(出典) DCMS 2016 より作成

## 2. 東ロンドンを中心としたクリエイティブ経済の活性化

### (1) テック・シティ

東ロンドンのショーディッチ、オールド・ストリート界隈は、1980～90年代には一般市民が怖くて立ち寄れなかった地域だが、現在はテック・シティ (Tech City) と呼ばれ、クリエイティブ経済の中心地となっている。

治安の悪かったこの地域に、まずアーティストやファッションデザイナーなどのクリエイターが低廉な家賃に惹かれて移り住み、ギャラリーも次々にオープンしていった。次の段階として、IT系のテック・デザイナーが集まってきた。すると周辺に、洒落たバーやレストランが生まれはじめ、ロンドンで最もクールな地区として知られるようになった。クリエイティブ産業集積の中心地となったオールド・ストリートのラウンドアバウト (円形交差点) 界隈は、「シリコンバレー」をもじって「シリコンラウンドアバウト」と呼ばれるようになる。このようにしてショーディッチ、オールド・ストリートのエリアは民間主導で成長が進み、英国におけるクリエイティブ・クラスターのイノベーションの成功事例として注目を集めた。

そうして政府が、後追的に支援に乗り出す。キャメロン首相は2010年11月、この地域を「テック・シティ」と命名し、「英国版シリコンバレー」へと発展させるべく公的支援を行うことを明らかにした。政府は、起業に対する税制面の優遇や、投資家のスタートアップ企業に対する投資への減税措置を講じるとともに、テック・シティ投資促進機構 (Tech City Investment Organisation = TCIO) を設立し、起業しようとする人への技術的サポートや、産学官のネットワークの構築などを図った。クリエイターをサポートするインキュベータの整備なども行っている。

行政のそうしたサポートが後押しとなって、ロンドン東部に所在するテクノロジー、デジタル関連の企業数は、2008年に10社程度であったものが、2010年に約200社、現在は約1,500社と急速に増えている。アマゾンはこの地域にデジタルメディア開発センターを置き、グーグルはテクノロジー、デジタル産業の起業支援を目的とした施設「グーグル・キャンパス」を開設。シスコも大学などと連携して、テクノロジー、デジタル、メディア分野の起業を支援する施設「アイデアロンドン」を開設した。

わが国では、クリエイターをはじめ創造的な職種の人々が集い交流する拠点施設を、コ・ワーキング・スペースやクリエイティブ・スペースと呼ぶことがあるが、英国ではこうした施設を「クリエイティブ・ハブ (Creative Hub)」と呼ぶようだ。BCによれば、後述するトランペリー (ロンドン) やリゾート・スタジオ (マーゲイト) もクリエイティブ・ハブに該当する。クリエイティブ・ハブの育む創造的なコミュニティでは、さまざまなスキル、アイデアを持つ人々がそれらをぶつけ合い、シェアすることで、個々人では生み出すことのできない新しい価値を創造する。とはいえ、都市の中でクリエイティブ・ハブが生み出すイノベーションの意義やインパクトの大きさはまだ十分に理解されてはおらず、BCはこうした取り組みを、国を越えてネットワークすることで可視化させようと努めている。

テック・シティ繁栄のデメリットとして、経済的成功の結果として地域の家賃が上昇し、クリエイターが外に出て行かざるをえなくなること、いわゆる「ジェントリフィケーション (Gentrification)」の問題を挙げることができる。一方で、このエリアを出た彼らはロンドンのさまざまなエリアに分散しはじめ、テック・シティの動きはロンドン全体へと拡がりをみせている。



クリエイティブ産業集積の中心地となったオールド・ストリートのラウンドアバウト (円形交差点) この界隈は、「シリコンバレー」をもじって「シリコンラウンドアバウト」と呼ばれる



オールド・ストリート界隈は、1980～90年代には治安が悪く一般市民が立ち寄れなかったがアーティストやデザイナーなどのクリエイターが低廉な家賃に惹かれて移り住み、ギャラリーも次々にオープンしていった 次に IT 系デザイナーが集まり周辺に、洒落たバーやレストランもできロンドンで最もクールな地区として知られるようになった 写真は自転車店とジュース店が融合したおしゃれな店舗



## (2) クリエイティブ人材・産業の育成

BC によれば、クリエイティブ人材の育成に決まりきった方策はない。自由な発想を要する創造性の発揮と、定型的なビジネススキルの教育とは相容れない面があるという。もっとも、創造性を仕事へつなげていくうえでビジネススキルも重要であり、芸術文化系の教育現場でも、起業に着目した教育が行われている。クリエイティブ・ハブも、単に場所貸しを行うだけではなく、ビジネスモデル構築などのスタートアップ支援、トレーニングを行っている。

クリエイティブ産業の資金調達については、IBM やマイクロソフトが支援スキームを立ち上げている。ただし、従来型のベンチャーキャピタルはクリエイティブ産業の育成にはそぐわない面もあり、よりリスクテイクができるスキームが必要であるというのが BC の見解である。

クリエイティブ・ハブを芽吹かせるには、草の根の活動が不可欠である。クリエイターがやりたいことを自由に行える環境をつくるのが重要であり、行政としてなすべきことは「そうした取り組みが生まれる環境」を創造することであろう。家賃保証により資金面の困難を解消するなど、リスクを冒せる環境づくりも重要である。

## (3) トランペリー

BC 本部でのレクチャーを受けた後、視察団は東ロンドンへと実際に足を延ばした。そこで、テック・シティを代表するクリエイティブ・ハブ「トランペリー・オールド・ストリート」を訪問し、トランペリー (The Trampery) のチャールズ・アームストロング代表から話を伺うとともに、施設の見学を行った。

トランペリー社は、デザイン、テクノロジー、ファッション、アートなどさまざまなクリエイティブ産業を対象に、スペースを提供するクリエイティブ・ハブの運営を行っており、快適で美しい職場環境と、多様なビジネスが学びあい協働できる創造的な環境を、クリエイターに提供している。同社は社会的企業 (Social Enterprise) として、自社の利益追求ではなく他のビジネスをサポートすることを目的とし、ビジネス効果の最大化と多様な要素の結合を目指している。このため、クリエイティブ・ハブの内部は、各企業のオフィスが独立した閉鎖型のレイアウトにはなっておらず、人々が施設内を自由に行き来できるようにしている。また、単なる場所貸しではなく、ネットワーク構築に役立つイベントも多数開催している。ハブへの入居者を選ぶ場合、他のビジネスとのコラボレーションができるポジティブな姿勢を持っている企業であることを選定基準としている。

日本の公的インキュベータでは入居期間を限定するケースが多いが、トランペリーの目標は「強いコミュニティ」を創造することであり、テナントには長期間入居してもらって成長を促すことを目指している。

トランペリーは2009年以降、7つのクリエイティブ・ハブを設置したという。この数には手狭になって移転した施設なども含まれるのか、トランペリー社のウェブサイトを確認できた限りでは、現在4ヶ所のクリエイティブ・ハブを運営しているようだ。ショーディッチにあるトランペリー・オールド・ストリート (Old Street) とトランペリー・ベベンデン・ストリート (Bevenden Street)、タワー・ブリッジにあるトラベルテック・ラボ (Traveltech Lab)、ハックニー・ウィックにあるフィッシュ・アイランド・ラボ (Fish Island Labs) である。

今回視察したトランペリー・オールド・ストリートは、2014年10月に完成した最も新しい施設である。ここには現在、社員2~15人までの異なる規模の企業12社が入居している。入居企業の75%はソフトウェア産業であり、オールド・ストリートはITを中心としたクリエイティブ・ハブとなっている。この施設は中古ビルをリノベーションしたもので、ビル自体の古めかしい内装は残しながらも、そこに高感度のデザインを加えることでクールな雰囲気を出している。改装資金は、銀行借入や広告会社の支援、ハックニー・ロンドン特別区からの助成金などで調達した。

施設内には、会議やパーティーなどイベントに利用できる共用スペースを広く確保しており、デザイン性の高い食器が並ぶ調理・ダイニングスペースも備えている。酒類を提供するライセンスも持っていて、夜間はバーに変身するなど、通常のレンタル・オフィスとは異なり一種のコミュニティとして機能している。施設には会議室や応接室、休憩スペースが設けられ、クリエイターがデスクを離れてインフォーマルな情報交換をしたり、顧客を迎えたりできる場となっている。

トランペリーの運営するクリエイティブ・ハブは施設ごとに性格が異なり、トラベルテック・ラボは、ロンドンの公式プロモーション団体であるロンドン&パートナーズと提携した、観光産業振興のためのインキュベータとなっている。また、フィッシュ・アイランド・ラボは、ロンドン最大級の芸術文化施設であるバービカン・センターと提携した、デジタル・テクノロジーを使う新進アーティストのためのインキュベータである。

トランペリー・オールド・ストリートのデスク借料は400ポンド/月と高いが、この施設にオフィスを構えていることが、入居企業にとって大きなステータスとなる。他のアーティスト向けの拠点では150ポンド/月という場合もある。以前と異なりショーディッチ、オールド・ストリート界隈の不動産は高騰しているが、オリンピ

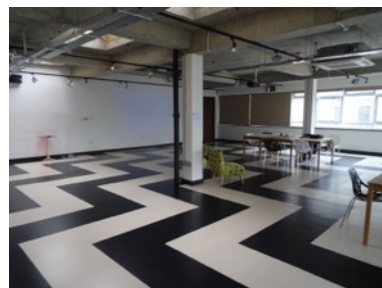


ック・パーク近くのオフィスであれば、まだかなり安い。各施設は独立したエージェントとして機能させており、施設ごとに初期投資を回収するスキームとしている。

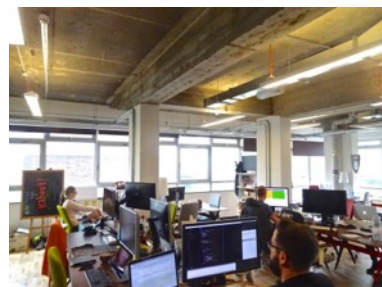
最近では、ロンドンのクリエイティブ産業だけにとどまらず、オスロ（ノルウェー）、スイス、オースティン（アメリカ）など海外との連携もはじめた。この新しいプロジェクトでは、海外の起業家がロンドンに来てビジネスをスタートできるよう600戸のアパートを用意して、通常より安価な家賃で提供するとともに、トランペリーの拠点でビジネスサポートを行っている。



東ロンドン、テック・シティを代表するクリエイティブ・ハブ「トランペリー・オールド・ストリート」を訪問 周囲は、わくわくするようなおしゃれな店舗や、パブ、ライブハウスなど楽しめる環境が整っている



この施設は中古ビルをリノベーションしたもので、ビル自体の古めかしい内装は残しながらも、そこに高感度のデザインを加えることでクールな雰囲気を出している 社員2~15人までの異なる規模の企業12社が入居している 入居企業の75%はソフトウェア産業であり、オールド・ストリートはITを中心としたクリエイティブ・ハブとなっている



会議やパーティーなどイベントに利用できる共用スペースを確保しており、デザイン性の高い調理・ダイニングスペースも備えている 酒類を提供する免許も持っていて、夜間はバーにするなど、通常のレンタル・オフィスとは異なり一種のコミュニティとしての機能を持つ 施設には会議室や応接室、休憩スペースが設けられ、クリエイターがインフォーマルな情報交換をしたり、顧客を迎えたりできる場となっている

### 3. デザイン・ミュージアム

視察団は、クリエイティブ経済の根幹をなすデザイン産業への貢献という視点から、デザイン・ミュージアムを視察することとした。

デザイン・ミュージアムは、観光名所であるタワー・ブリッジに近い、テムズ川南岸のバトラーズ埠頭に立地しており、後述するテート・モダンから東に約2kmの距離にある。家具・インテリアデザイナーのテレンス・コンランが、河岸の倉庫を改修して1989年にオープンした施設で、モダン・デザインをテーマとするミュージアムとしては世界初とされる。視察時には「デザイン・オブ・ザ・イヤー2015」のノミネート作品を展示する企画展を開催していた。「デザイン・オブ・ザ・イヤー」とは、世界中のデザインを対象に、建築、デジタル、ファッション、グラフィック、プロダクト、輸送機関の6部門から優れたデザインを選考するアワードである。

小規模なミュージアムではあるが、1階のミュージアムショップは比較的充実していて、世界各地のデザイナーズ・グッズが販売されている。また2階には、伝統的な英国料理をアレンジしたモダン・ブリティッシュのカフェ「ブルー・プリント・カフェ」が入っている。視察団はここでランチ・タイムを過ごしたが、窓越しにテムズ川やタワー・ブリッジを眺めながら、魚介類を中心とした食事をいただくことができた。

なお、現在のデザイン・ミュージアムは手狭になったことから、2016年にロンドン西部のケンジントンに移転する予定である。1960年代に建てられた旧英連邦の研究所をコンバージョン（用途転換）するもので、広さは現在の3倍に拡大するという。



デザイン・ミュージアムは、観光名所であるタワー・ブリッジに近い、テムズ川南岸のパトラーズ埠頭に立地、モダン・デザインをテーマとするミュージアムとしては世界初とされる。ミュージアムショップは充実しており世界各地のデザイナーズ・グッズが販売されている。



視察時には「デザイン・オブ・ザ・イヤー2015」のノミネート作品を展示する企画展を開催していた。2階には、窓越しにテムズ川やタワー・ブリッジを眺めながら食事が出る「ブルー・プリント・カフェ」が入り、映画の撮影などにも利用されている。

## 4. ロンドンにおける文化ツーリズムの振興とテート

### (1) 文化で活性化したロンドン観光

次に、文化資源が観光振興に果たす役割、すなわち文化ツーリズムの視点から、国立文化施設に対する英国の取り組みを見ておきたい。

英国は2001年に、国立博物館・美術館の入場料の無料化を行った。労働党ブレア政権下でDCMSの大臣を務めたクリス・スミスが、財務省の反対を押し切って断行したものである。この入場料無料化は、英国国民が芸術文化に接する敷居を下げただけではなく、海外からの多数の観光客を招き入れ、英国の観光振興に多大な貢献をした。無料化によって6.9万人の雇用が生まれ、6,500人の若者が文化団体で働く機会を得たとの試算もある。英国を訪れる観光客は、こうした博物館・美術館の見学や、ミュージカルの鑑賞といった文化体験にお金を落としているのだ。このため、財政健全化を重んじる保守党・自由民主党に政権が代わった後も、無料化は継続された。

2012年のロンドン五輪における文化プログラムもまた、ロンドンをはじめ英国各地の観光地としての地位向上をもたらしたとされる。マスターカードが毎年発表している世界観光都市インデックス（Global Destination Cities Index）の2014年版によれば、2014年に海外からロンドンを訪れる来訪者は1,869万人と見込まれ、前年トップのバンコクを抜き、「世界で最も人気のある旅行先（the most popular tourist destination in the world）」に輝いた。

こうした文化ツーリズムの目的地として、今回の視察ではロンドンに立地する美術館、テート・ブリテンとテート・モダンを訪れた。特にテート・モダンは、文化ツーリズムの目的地となる美術館を表彰するLCDアワード（Leading Culture Destinations Awards）2015を、展覧会・プログラム部門で受賞している<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 大分県立美術館（OPAM）は、LCDアワード2015のアジア太平洋地域新設文化施設部門を受賞。

## (2) テート・ブリテン

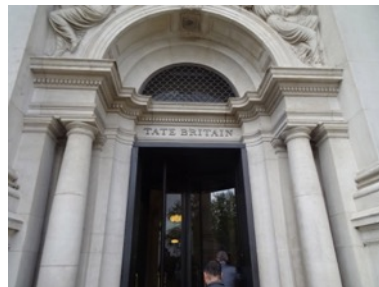
テートは英国政府の美術コレクションを所蔵・管理する組織で、ロンドン市内の2館に加え、テート・リバプール、テート・セント・アイヴスといった英国各地の美術館から構成される国立美術館ネットワークである。

このうちテート・ブリテンは、テート・グループの中で最も早く開館した美術館である。この美術館は、英国の自国美術を独立した美術館に展示して顕彰しようという機運の中、1897年にテムズ川北岸のミルバンク地区に開館した。運動の先頭に立った実業家ヘンリー・テートの名まえを冠している。

当初はナショナル・ギャラリーの美術専門分館との位置づけであったが、後に、世界の近現代美術も扱うようになり、1955年にテート・ギャラリーという独立した美術館となった。2000年になって、サザーク地区に近現代美術専門の美術館テート・モダンが開館したため、テート・ギャラリーは再び英国美術専門の美術館となり、改修工事を行ったうえで、2001年にテート・ブリテンとして再出発した。現在は、1500年代から現代までの6世紀にわたる英国美術のコレクションを鑑賞することができる。

中でも充実しているのは、英国を代表する風景画家J・M・W・ターナー（1775～1851）の手になる油彩画・水彩画の一大コレクションである。実に、油彩画約300点、素描・水彩画1万9千点が収蔵され、その一部が1987年に増築されたクロア・ギャラリーに展示されている。OPAMの開館記念展「モダン百花繚乱「大分世界美術館」」に展示された「ブイのある風景」「ルツェルン湖：ブルネンよりウーリ湾をのぞむ」も、テートのターナー・コレクションから貸し出された作品である。また、ギャラリーには、今回の視察先であり、ターナーがこよなく愛した土地マーゲイトの風景画も展示されていた。19世紀絵画では他に、ラファエル前派のコレクションがたいへん充実している。

テート・ブリテンはこうした歴史的名画のコレクションと同時に、英国の現代アートも積極的に蒐集しているようだ。テートは1984年からターナー賞を主催しており、英国で顕著な活躍を行っているアーティストへの授賞も行っている。過去の受賞者には、リチャード・ロング、アニッシュ・カプーア、アントニー・ゴームリー、ダミアン・ハーストなど錚々たる顔ぶれの現代アーティストが名を連ねている。



英国は2001年に、国立博物館・美術館の入場料の無料化を行ったことで、観光客が博物館・美術館の見学や、ミュージカルの鑑賞といった文化ツーリズムが人気を博し2014年「世界で最も人気のある旅行先」に輝いた。テート・ブリテンでは、1500年代から現代までの6世紀にわたる英国美術のコレクションを鑑賞することができる。



歴史的名画のコレクションと同時に、英国の現代アートも積極的に蒐集している

J・M・W・ターナーのコレクションが充実している。作品はマーゲイトの海を書いた「Breakers on Flat Beach」

## (3) テート・モダン

テート・モダンは、テムズ川南岸のサザーク地区に2000年に開館した美術館であり、20世紀以降の国際的な近現代美術をテーマにした作品収蔵・展示を行っている。

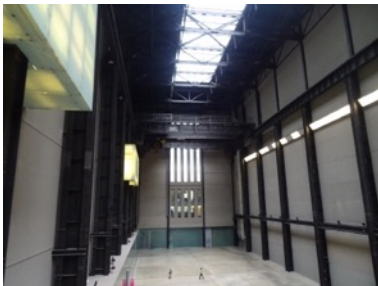
この美術館の建物はもともと発電所として建てられたもので、高さ99mの煙突が特徴的な地域のランドマークであった。サー・ジャイルズ・ギルバート・スコットの設計により1963年に完成したバンクサイド発電所である。発電所としての役割を1981年に終えたこの建物を美術館へとコンバージョンする設計を担当したのが、建築家コンビのヘルツォーク&ド・ムーロンである。



テート・モダンが立地するサザーク地区は、ロンドンの中でも貧困などさまざまな社会問題を抱えた地域で、こうした地域課題に取り組むべく、戦略的に旧バンクサイド発電所への立地を決めた



テート・モダンの開館年の来館者数は560万人であり、その後も500万人を割ったことがない。この人気の要因は、展示作品などのコンテンツではなく、美術館の開放性、公共性にあったという。毎年1億ポンドの経済効果をロンドン経済にもたらし、ホテルや飲食サービスといった観光部門を中心に、5年間で4千件の新しい雇用機会を創出しており、その半分以上がサザーク地区で生まれた。



私たちが視察したときも、テート・モダンは大勢の来館者で混雑していた。一般市民や観光客がロンドンで美術鑑賞を行う場合、現代アートよりもターナーやラファエル前派などの名画を好みそうなものだが、テート・モダンの混み具合は明らかにテート・ブリテンを上回っていた。

テート・モダンは、レベル0～6までの7層から構成され、レベル2～4が企画展および常設展の展示室にあてられている。常設展示は、4つのテーマに沿って構成される。レベル2「詩と夢」は、シュルレアリスムを中心とする無意識や夢の世界、レベル3「変容するビジョン」は、第二次大戦後の人間性や社会の変容を主題とする。レベル4には「エネルギーとプロセス」、「構造と明晰性」の二つの常設展示があり、前者はアルテ・ポーヴェラ、ポスト・ミニマリズム、もの派などに、後者はキュビズム、構造主義などの抽象芸術にフォーカスしている。その他のフロアには、ミュージアムショップ、レストラン&バー、カフェ、セミナー・ルームなどが入っている。

そうした中であって、テート・モダン最大の特徴は、レベル0のタービン・ホールであろう。かつて大型発電機が設置されていた巨大な吹き抜け空間である。このホールは、現代アーティストが制作した大型インスタレーション作品の展示にも使われるが、残念ながら今回の視察時には展示が行われていなかった。実は、テート・モダンの国際建築コンペでヘルツォーク&ド・ムーンロンが選ばれた勝因は、このタービン・ホールの使い方に関する提案が優れていたからだという。

そのことを説明する前に、テート・モダンが立地するサザーク地区に言及したい。サザークは、ロンドンの中でも生活に困窮した住民が多く、失業率も高いなど、さまざまな社会問題を抱えた地域であった。ロンドン市民ですら立ち入るのを躊躇う土地であったという。テート・モダンは、こうした地域課題に取り組むべく、戦略的に旧バンクサイド発電所への立地を決めたのだ。テート・モダン初代館長を務めたラース・ニッティヴによれば、テート・モダンの特徴は「全ての人々のための美術館(A Museum for Everyone)」、「公共サービスの美術館(Public Service Museum)」<sup>7</sup>であるという。

<sup>7</sup> 第7回21世紀ミュージアム・サミット「まちとミュージアムが織りなす文化～過去から未来へ～」におけるラース・ニッティヴ講演による

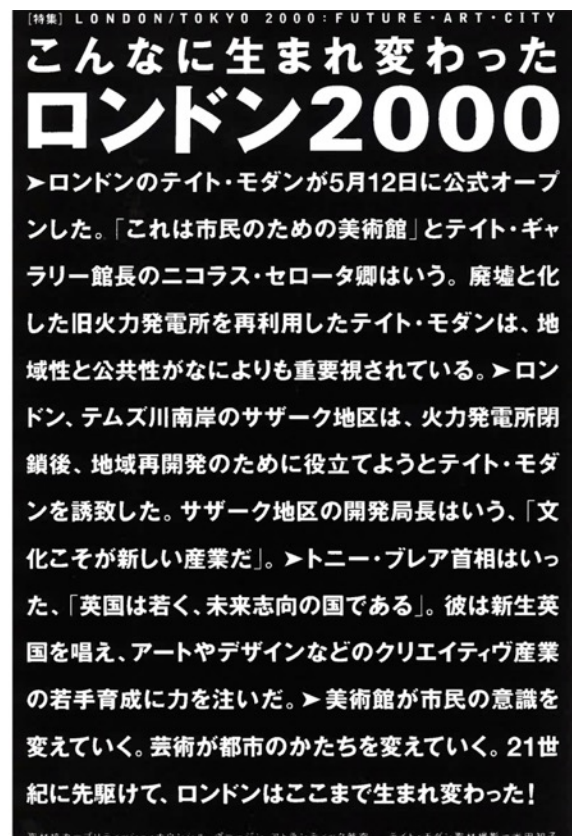
テムズ対岸のシティ地区から、ノーマン・フォスター設計の歩行者専用橋ミレニウム・ブリッジを渡ると、テート・モダンが聳えている。サザークのあるテムズ川南岸に、ロンドン市民の目を向けようとしたのだ。そして来館者は、橋梁や道路からのごく自然な延長としてそのままタービン・ホールへとスムーズに入っていくことができる。このようにタービン・ホールを、街と地続きの公共空間として用いたことが、ヘルツォーク&ド・ムーロンによる設計提案の真骨頂であった。

テート・モダンの開館年の来館者数は560万人であり、その後も500万人を割ったことがない。計画時には、コンサルタントは150万人、美術館スタッフでも250万人程度と見込んでいたそうだが、そうした予想をはるかに上回る結果となった。この人気の要因は、展示作品などのコンテンツではなく、美術館の開放性、公共性にあったという。開館後に行った調査から、テート・モダンには普段は美術館などに行かない人々が大勢訪れていることが分かった。たまたまテート・モダンに行った近隣住民や職場の同僚、親戚が「この美術館は自分たちのための美術館だ」という感想を口コミで広め、そうした評判を聞いて多くの人々が訪れたのである。

実際、私たちが視察したときも、テート・モダンは大勢の来館者で混雑していた。一般市民や観光客がロンドンで美術鑑賞を行う場合、現代アートよりもターナーやラファエル前派などの名画を好みそうなものだが、テート・モダンの混み具合は明らかにテート・ブリテンを上回っていた。

テート・モダンの監視員は、人数が少なく、身なりも監視員らしくないという。監視員の6割は地元住民を採用しており、彼らは制服を着用せず普通の衣服を身にまとい、監視員というよりもガイド役として活動している。英国では従来、監視員が来館者に話しかけるのはタブーとされていたが、テート・モダンでは逆に、積極的に彼らに話しかけることで、互いの心を開き、ややもすれば難解と思われがちな現代アートを理解してもらえるように心がけている。

テート・モダンは、テムズ沿岸や美術館の半径10街区におよぶエリアの活性化に貢献した。地域の公共交通や歩道、サイン表示なども改善された。この結果、地価が上昇し、貧しい人々が地区から出ていかざるをえなくなる、いわゆるジェントリフィケーションの問題も一部では発生しているという。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス調査によれば、テート・モダンは、毎年1億ポンドの経済効果をロンドン経済にもたらし、わずか1年半で建築コストを回収したとされる。ホテルや飲食サービスといった観光部門を中心に、5年間で4千件もの新しい雇用機会を創出しており、その半分がサザーク地区で生まれた。



美術手帖2000年8月号より 視察で、2000年のテートモダン建設当時の目的が達成されていることがわかった 創造都市の好例といえる

## 第3章 芸術文化を核とした地方創生

今回の視察は、英国の文化オリンピック、アーツカウンシル、クリエイティブ経済を主な調査研究テーマとしたため、いきおい、ロンドンの滞在期間が長くなった。しかしながら、芸術文化の創造性を活かした地方創生のあり方を考えるうえで、単独の都市ではなく多種多様な先進事例から学ぶ必要がある。このため、英国ではロンドンに加えて地方都市マーゲイトを訪れるとともに、フランスではリール、ランス（Lens）、パリ、ランス（Reims）を訪問することとした。

### 1. ターナー・コンテンポラリーによる地方都市マーゲイトの再生

#### （1）アートによる地方都市再生の代表事例

大分県という地方圏における創造都市のあり方を考えるうえで、英国の首都ロンドンだけを視察するのでは不十分といえる。このため同友会では、英国の地方都市における芸術文化を活かした活性化事例を探したいと考えた。そうした中、ブリティッシュ・カウンシルから推薦されたのが、英国南東部の小都市マーゲイトである。今回、アーツカウンシル・イングランドを訪れた際にも、マーゲイトの取り組みは、困難を抱えた地域がアートの力に刺激され、雇用創出や経済効果に加えて、住民のやる気と今後の可能性を生み出すことができた好例であるとの発言が先方からあった。このようにマーゲイトは、英国における地方都市再生の代表事例と位置づけられている模様である。

マーゲイトでは、都市再生の推進役を担った美術館ターナー・コンテンポラリーの学習・来館者体験部門ヘッドのカレン・エスリー氏、企業・経理部門ヘッドのサマンサ・ロイド氏、そして美術館と協働している団体アーツワークの戦略マネージャー、ルーシー・メドハースト氏から、ターナー・コンテンポラリーの取り組みについてレクチャーを受けた。さらに、レクチャー後のランチ・ミーティングからは、サネット区の観光マネージャーであるポーラ・ハービッジ氏も参加。美術館でランチをいただいた後に、マーゲイトの旧市街を散策し、活性化の状況を視察する機会を得た。さらに、まちなかに生まれたクリエイティブ・ハブ「リゾート・スタジオ」の見学も行い、中心メンバーのダン・チルコット氏より施設の説明を受けることができた。

#### （2）マーゲイトの疲弊と再生

ロンドンから東に車で2時間ほどの距離にある人口5.7万人の地方都市マーゲイト。英国南東部の港町であり、行政的にはケント州サネット区に所属する。マーゲイトは18～20世紀にかけて海洋リゾートとして繁栄した歴史を持つ。マーゲイトをこよなく愛した画家J・M・W・ターナーは、1820～30年代にしばしばこの街に滞在し、マーゲイトやケント州北部の海岸を描いた作品を100点以上残しており、その多くはテートのターナー・コレクションに収蔵されている。

しかしながら、サッチャー政権時代の交通政策（海外への渡航運賃の引き下げ）の影響もあり、それまでマーゲイトに来ていた国内観光客が海外に流出し、街は斜陽化した。観光産業の衰退は失業率の上昇を招き、それは単に経済的な影響にとどまらず、市民のアイデンティティの喪失をも招いた。旧市街であるオールド・タウンはシャッター街となり、海辺にあった大きな遊園地ドリームランドも閉園した。住宅エリアは、英国で最も貧困の厳しい地区の一つとなり、特にクリフトンヴィル（Cliftonville）には、ロンドンから生活保護受給者や難民が流入したという。

こうした中、サネット区とケント州は、マーゲイトのレガシーであるターナーを記念して、アートによる都市の再生を構想した。おりから、国内外で文化主導型の都市再生が進んでいた時代であり、アーツカウンシル・イングランドの支援も得て、ターナー・コンテンポラリーの建設計画がスタートする。2001年に、美術館建設を進める組織がケント州の一部門として設けられ、同年に教育普及担当のカレン・エスリー氏が、その翌年に館長のヴィクトリア・ポメリー氏が着任した。美術館の設計は、国際建築コンペを経て進められたが、当初の設計案は野心的に過ぎるとして途中で破棄され、新たに建築家のデイヴィッド・チッパーフィールド<sup>8</sup>が設計を担当することとなった。彼は、自らの美術館デザインを地元で説明・展示し、そこから得た住民意見を踏まえてデザイ

<sup>8</sup> デイヴィッド・チッパーフィールドは英国を代表する建築家の一人。2013年に、高松宮殿下記念世界文化賞をアントニー・ゴームリーと同時受賞している。

ンを見直すといった住民参加型のプロセスを踏みながら、ターナー・コンテンポラリーの設計を進めた。

このように美術館の建設計画は紆余曲折をたどったが、エスリー氏はその間、マーゲイトのまちなかへ入り込み、数多くの展覧会や講演、ワークショップなど、地域コミュニティと文化をつなげるさまざまなプログラムを開催し、住民参加を進めていった。とはいえ、ターナー・コンテンポラリーの敷地は当時、駐車場であり、マーゲイトにはそれまで文化的なインフラが存在しなかった。このため、美術館スタッフは、閉店したマーク&スペンサーの空き店舗や、湾岸にある旧税関であった建物ドロイトハウスなどをプロジェクト・スペースとして活用したという。美術館開館前に行われたプロジェクトへ参加した人々の数は累計で70万人にのぼり、こうした継続的な取り組みが、市民のアートへの関心を高める結果につながった。また、こうした取り組みを聞きつけたアーティストが、美術館とは別に自らマーゲイトにスタジオを構えるようになり、オールド・タウンには多くのギャラリーがオープンした。

こうした息の長い取り組みの結果、ターナー・コンテンポラリーは2011年4月に開館するや、大勢の来館者でにぎわい、市民に愛される美術館となった。開館時には10日間にわたる開館フェスタを催し、1週間で3万人が美術館に詰めかけた。地域住民100人で構成される合唱隊がオープニングを飾り、地域の誇りとなった。ダンス・フェスティバルも催され、地元出身アーティストのトレイシー・エミンは市民参加型のプロジェクトを行った。過去15年間でマーゲイトにこれほどの人出はなかったという。

ターナー・コンテンポラリーは決して大きな美術館ではないが<sup>9</sup>、開館から4年間ですでに累計150万人が来館している。来館者の6%はそれまで美術館を訪れた経験を持たない人々であり、この美術館はそうした層の人々に新たな文化体験を与える大きな効果を発揮した。また、ターナー・コンテンポラリーは地域に開かれた美術館を目指し、未就学児から高齢者までさまざまな人々を対象とした学習プログラムを実施しており、学習スタジオの利用者も累計11万人にのぼる。

ちなみに、同友会が視察を行う2ヶ月前の2015年3月には、当時シャーロット王女を懐妊中であったキャサリン妃も、ターナー・コンテンポラリーを公式訪問したという。

### (3) ターナー・コンテンポラリーの概要

ターナー・コンテンポラリーは、マーゲイト中心部にある岬の手前に建っている。旧市街オールド・タウンに隣接するこの土地は、ターナーがかつてこの街に滞在していたときに利用したゲストハウスがあった場所だという。このように街を象徴する景観スポットに建つ美術館は、片流れの屋根と真っ白な外観が特徴的な建物である。

1階の入口から美術館に入ると、吹き抜けのロビーの壁一面が窓となっており、かつてターナーも眺めたであろうマーゲイトの海辺の景観を楽しむことができる。視察当時はこのロビーに、メキシコ人アーティストのカルロス・アモレールの大きな彫刻作品が置かれていた。多数のシンバルが吊り下がったモビール状の作品であり、鑑賞者はシンバルを叩いて遊ぶことができる。来館した子どもたちに加わって、視察団メンバーもシンバルを叩いてみた。この他に美術館の1階には、ショップ、カフェ、イベント・スペースが設けられ、2階が展示室と学習スタジオにあてられている。

ターナー・コンテンポラリーの建設資金はアーツカウンシル・イングランドや地元自治体の助成を受けており、公共主導のプロジェクトである。一方で運営は自治体直営ではなく、チャリティと呼ばれる民間非営利セクターが担っている。

ターナー・コンテンポラリーは基本的に収蔵品を有しておらず、開催される展覧会は常設展ではなく企画展である。作品を他の機関などから借りてきて、おおむね4ヶ月ごとに作品の展示替えを行って新たな企画展を開催している。同友会が視察した際に開催されていたのは「セルフ(自画像)」というタイトルの企画展だった。その目玉は、英国の著名な画家ヴァン・ダイクが描いた最後の自画像とされる作品である。個人蒐集家のコレクションであったが、転売されて国外に流出しそうになったところを英国政府が差し止めた。ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーやターナー・コンテンポラリーが、企業や市民から1,000万ポンドを募り、この作品を入手した。この絵画は今後、英国各地へ巡回するが、その最初のお披露目が当美術館となった。

「セルフ」展は、このヴァン・ダイクの絵画を中心に、現代にまで至る自画像の系譜を展示する。ヴァン・ダイクは生涯に数多くの肖像画を手がけ、英国美術における肖像画の概念を革新した画家である。そんな彼の自画像に呼応するような現代アート作品(アントニー・ゴームリー、ダミアン・ハーストなど)を展示し、過去と現在をつなぐことを試みるという企画であった。

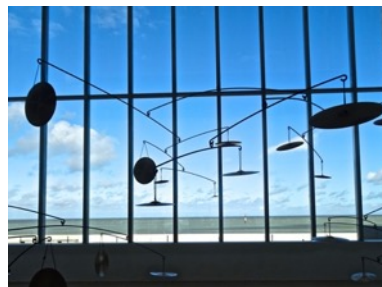
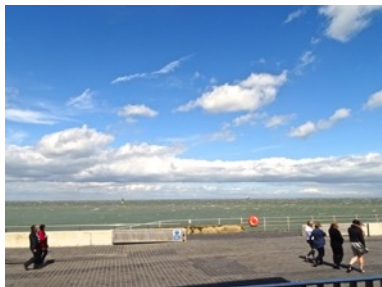
ターナー・コンテンポラリーでは、企画展に合わせて毎年コンペを行っており、今回のテーマは、ずばり「セル

<sup>9</sup> ターナー・コンテンポラリーは敷地面積6,750㎡、延床面積2,865㎡。延床面積でみてOPAMの17%程度の規模である。

フ（自分）」である。対象は3～18歳までの若者で、毎年1,200点ほど応募がある。このコンペは、大学と提携して行っているもので、文化に関心のない人々に向けて大学が働きかけ、彼らに参加してもらうことを大きな目的としている。無料のワークショップなどを行い、多くの学生に文化に関わる機会を提供している。コンペの授賞式は、応募者の家族や友人など約400人が集まって盛大に催されるそうだ。



マーゲイトは人口5.7万人の英国南東部の港町で18～20世紀にかけて海洋リゾートとして繁栄した。近年観光産業は衰退し市民はアイデンティティを喪失した。対策としてアートによる都市再生を構想し、ターナー・コンテンポラリーを建設した。結果として困難を抱えた地域がアートの力に刺激され、雇用創出や経済効果に加え、住民のやる気と今後の可能性を生み出すことができた。



マーゲイトをこよなく愛した画家J・M・W・ターナーは海岸を描いた作品を100点以上残している。美術館に入ると、吹き抜けのロビーの壁一面が窓となっており、かつてターナーも眺めたであろうマーゲイトの海辺の景観を楽しむことができる。



ターナー・コンテンポラリーでは「アートで地域を活性化し、全ての人がアートと関わり、人と人がつながる」ことをビジョンとしており、教師が生徒に教える「教育 (Education)」ではなく、未就学児から高齢者まで全ての人々がより積極的に学んでいくというニュアンスで「学習 (Learning)」を行っている。大分でも学校教育以外の社会での「学習」の必要性を感じる。

#### (4) ターナー・コンテンポラリーの学習プログラム

ターナー・コンテンポラリーは、「アートで地域を活性化し、全ての人がアートと関わり、人と人がつながる」ことをビジョンとしている。このため、学習プログラムを最重視しており、年齢や環境などのバックグラウンドに関わらず、全ての人々に美術館で何かを学んでもらいたいという思いで活動している。このため市民参加に力を入れており、そうした機会を通じて、子どもや大人に好奇心を発揮してもらおうとしている。例えば毎週火曜日の朝には、10代の子もたちがギャラリー横でダンスを行うなど、他の美術館では考えられない企画を実施している。この場には子どもに限らずさまざまな人々が集まり、新たな利用者の創出 (Audience Development) に貢献している。こうした取り組みは世界的にも注目を集め、英国内でも成功事例とされている。

先ほど「教育普及」という美術用語を用いたが、ターナー・コンテンポラリーでは正確には、教師が生徒に教える「教育 (Education)」ではなく、未就学児から高齢者まで全ての人々がより積極的に学んでいくというニュアンスで「学習 (Learning)」という言葉を用いているという。この学習部門のヘッドがエスリー氏だが、彼女はそれだけではなく、受付やショップも含め来館者に対応する部門全体を統括している。

全ての展覧会で、会期の半年前に必ず「対話への参加 (Join the Conversation)」というプログラムを行っている。一般市民を集めて、展示予定の作品について専門家と対話する機会を設けるものだ。その場には、キュレー



ターや学習部門担当者から受付に至るまで全スタッフが参加し、作品を来館者にどう説明し解釈してもらうかを一緒になって考える。こうしたプロセスを経ることで、さまざまな市民の声が展覧会のキュレーションに的確に反映される仕組みになっている。

「ユース・ナビゲーター (Youth Navigator)」は10代を対象としたプログラムで、彼らが哲学者、アーティスト、スタッフの協力を得て、アートをさまざまな視点から鑑賞して質問する力を養うものである。その後、彼らは実際にギャラリーに赴き、一般の人々とアートについて対話を行う。このプログラムの効果を検証したところ、子どもたちの自信、コミュニケーション能力、批判力が高まり、物事を語る言葉が増えたという結果が出た。

「まっさらなキャンバス (Blank Canvas)」は、3～90歳までを幅広く対象としたプログラムで、コミュニケーションの断絶や世代間の格差を埋めていくことを目的とする。例えば、13歳が90歳と対話するといったことに意味がある。毎週グループで集まってセッションを行うことで、高齢者の孤立の問題にアプローチしたり、地域やコミュニティのつながりを深めることに貢献している。

各プログラムはさまざまな方法で人を集めているが、平均すれば、参加者の3割が近隣地域、3割が英国南東部、残る4割が英国各地&海外から来ている。地理的に広範囲をカバーするのは困難な面もあるが、ケント州全体の活性化が美術館の当初からのミッションであり、州の学校や教師との連携を通じて参加者を集めている。

このようにターナー・コンテンポラリーは、地域との密接な関わりという点で大きな特徴を持ち、英国内はもとより、欧州においても高く評価されている。

## (5) 外部機関との連携による学習プログラム

ルーシー・メドハースト氏の所属するアーツワークは、アーツカウンシル・イングランドが認定するブリッジ機関<sup>10</sup>の一つである。

ターナー・コンテンポラリーは、この機関と連携してインスパイア・プログラムを実施している。このプログラムは、美術館がケント州の学校と連携してオリンピックのレガシー<sup>11</sup>を継続するプログラムであり、オリンピックがあったからこそ生まれた事業だといえる。資金は、ケント州の教育的資金と、アーツカウンシル・イングランドがブリッジ機関を介して行う戦略的助成から得ている。

インスパイア・プログラムは2013～14年にかけてのプログラムで、ケント州内の180校、400人の教師、100人以上のアーティスト、1万人の子どもたちが参加した。ブリッジ機関として、アーツワークとロイヤル・オペラ・ハウスが関わっている。

子どもがアートに参加することでリーダーシップを養う「アーツ・アワード (Arts Award)」は、60人の認定リーダーを育てることがプログラムのビジョンであり、それまで自分にチャンスがあるとは思わなかった子どもたちが、自信を持つ契機となったプログラムである。また、ケント州にある劇団やNPOなど12の芸術文化団体が連携した「ビッグ・アーツ・デイ (Big Arts Days)」は、2年間で24のワークショップなどを実施した。子どもたちの自発性を育成し、彼らが「自分で考える、伝える、教える」といった人間性を身につけていく内容である。このプログラムに参加した子どもたちは、自らケント州の文化マニフェストをつくるようになった。

これらのプログラムは、アートを通じて子どもたちのリーダーシップを醸成するとともに、子ども同士、子どもと教師、子どもと芸術文化団体、教師と芸術文化団体など、新しい交流、関係性を築いていくことも目的としている。4～17歳の子どもをプログラムにリーダーとして関わらせ、彼らの自信を育むことが、この地域では重要であった。中には、4歳の子どもが大人たちをリードした事例もある。参加した教師から「子どもたちが創造性を発揮し、変わっていく姿を目のあたりにして、逆に教師の側がインスピレーションを得る機会となった」との感想も寄せられた。教師が教えて子どもが習うという一方の教育ではなく、子どもたちが自発的に考える力、人間力を養ううえで、アートの力は大きい。また、12の芸術文化団体が連携するのは容易ではないが、さまざまな団体が一つの目標に向かって連携しあうようになったのも、オリンピックが残したレガシーである。

## (6) ターナー・コンテンポラリーの経済効果

リゾート地としての名声そのままの、美しい砂浜の端にターナー・コンテンポラリーは建っている。そこから道を一本隔てた陸側にオールド・タウンと呼ばれるマーゲイトのコンパクトな中心市街地がある。ターナー・コ

<sup>10</sup> ブリッジ機関 (Bridge Organisation) とは、子どもや若者が優れた芸術文化に触れる機会を持てるよう、文化部門と教育現場をつなぐ10機関をアーツカウンシル・イングランドが認定したものである。

<sup>11</sup> ロンドン五輪に際して、文化プログラムを広範に認定する仕組みとしてインスパイア・マーク認定事業が導入されたが、ターナー・コンテンポラリーのインスパイア・プログラムはそれとは異なるとのこと。

ンテンポラリーの開館と、地域を巻き込んだその活動により、まちなかにも変化が現れた。ターナー・コンテンポラリーの斜向かいでは、15年間閉鎖されていた古い建物が土産物店として再オープン。このほかカップケーキの店、レストラン、カフェバー、インド料理店、ヴィンテージものを扱うアンティークショップ、雑貨屋、アーティストの手でリノベーションされたペットショップなどが、旧市街の各所に点在しはじめ、今では空き店舗はほとんど見られない。

サネット区のポーラ・ハービッジ氏は、ターナー・コンテンポラリーの効果としてこうした商店街の活性化を挙げる。この結果、まちなかの印象が改善するとともに、スモール・ビジネス、ローカル・ビジネスも成長しているという。美術館の開館後に限っても、35件のビジネスが新たにスタートした。例えば、海藻を原料にしたオーガニックな石鹸を生産販売するビジネスなどが起業した。起業家精神にあふれる人々が地元で育ちはじめたのは、過去のマーゲイトにはなかった状況である。廃業した遊園地ドリームランドも、間もなく再開するという。

ターナー・コンテンポラリー 企業・経理部門ヘッドのサマンサ・ロイド氏は、地域住民を含む全ての人々の生活のクオリティを向上させ、幸せを感じてもらおうと、文化による地域再生が重要であったと語る。クオリティの高い生活の要素は、広い住宅、緑のスペース、雇用の機会、機能的で安全な街、文化・スポーツの機会、にぎわい、誇りに思える街の七つである。ターナー・コンテンポラリーができる以前のマーゲイトは、リゾート地ではあったが、文化的な魅力は乏しかった。このため美術館の大きな目的の一つは、文化面から生活のクオリティ向上を図ることで、マーゲイトの環境を社会的、経済的に改善することにあった。さらに、街の中心部に建てたことで、美術館はマーゲイトのシンボルとなった。

ターナー・コンテンポラリーは、ステークホルダーであるアーツカウンシル・イングランドなどに説明責任を果たすうえで、経済効果の測定も行っている。その計測に際しては、美術館の損益だけでなく、地元への経済波及効果も試算する。この他に美術館が、マーゲイトの認知度向上やインバウンド観光にどれだけ寄与したかを試算することも重要である。例えば一つの評価指標として、認知度の向上を広告換算して効果を算出している。

2014年の来館者は35万4千人で、前年比4千人の増加となった。来館者の31%は宿泊客である。日帰り客の消費単価が13ポンドであるのに対して、宿泊客の消費単価は57ポンドと高いため、宿泊をとまなう来館者を増やしていくことがポイントだ。地元の宿泊施設は、ターナー・コンテンポラリーの成功から大いに恩恵を受けており、そうした意味でも文化による地域再生は重要といえる。

2014年の経済効果は、グロスで1,110万ポンド（美術館支出204万ポンド、来館者関連支出906万ポンド）で、このうち地域へ落ちるネットの経済効果は786万ポンド（美術館支出124万ポンド、来館者関連支出662万ポンド）である。美術館が204万ポンドを投資したことで、786万ポンドの経済効果が生まれたといえる。雇用面では、149人の雇用（美術館スタッフ47人、経済効果にともなう間接雇用102人）を創出した。



マーゲイトにはオールド・タウンと呼ばれるコンパクトな中心市街地がある。ターナー・コンテンポラリーの開館により、空き店舗がリノベーションされ再オープンが相次ぎ、今では空き店舗はほとんど見られない。更に閉鎖された遊園地ドリームランド（写真下段右端）も2016年に再開業を予定しており、ターナー・コンテンポラリー効果として期待されている。

## (7) リゾート・スタジオ

リゾート・スタジオは、オールド・タウンから数百mの距離にあるクリフトンヴィルのアッソルスタン・ロード (Athelstan Road) の一角にある、小規模なクリエイティブ産業が集積するクリエイティブ・ハブである。施設を案内してくれたダン・チルコット氏は、リゾート・スタジオの創設メンバーの一人で、本業はニットを用いるアーティストだという。マーゲイトに2年前に移住してきた彼は、若手クリエイター7人でリゾート・スタジオを起業したが、現在の入居者は倍以上に増えたという。ファッションデザイナー、ジュエリーデザイナー、グラフィックデザイナー、写真家など多岐にわたる業種のクリエイターが入居している。

リゾート・スタジオの建物は煉瓦造りで、家主が書庫として使用していたビルをリノベーションしたものだ。ストリートに面した建物の1階は、展覧会や交流・共用のためのスペースで、2階以上がクリエイターのスタジオになっている。共用のオープンスペースでは、音楽パフォーマンスのイベントも開催している。特に何の広告も打っていないが、1年間で2千人以上が来館したという。リゾート・スタジオの建物はかなり大きく、上層階には未利用のまま手つかずの空間も残っている。自治体の助成金などを獲得しながら、徐々に手を入れてレンタル・スペースを拡げている段階であるようだ。

リゾート・スタジオに多様なジャンルのクリエイターが集まることで、情報交換ができたり、新たな協働が生まれたり、創作活動に必要な機器(写真の現像機器など)をシェアできるなど、「集まる」ことのメリットがあるという。個々人で活動するよりもネットワークが拡がり、またインスピレーションが得られるなど、互いにより影響を与えあう環境が生まれている。ロンドンには都市の規模が大きいので、クリエイティブ・ハブに集積するクリエイターも特定分野ごとにまとまりがちだが、ここではさまざまな分野のクリエイターが集まることで多様な分野の情報交換が進み、相乗効果を発揮できるとチルコット氏は語る。ターナー・コンテンポラリーやリゾート・スタジオなどが産まれたことで、マーゲイト周辺から美術大学に進学した学生が、ロンドンを目指すのではなく、マーゲイトに戻って活動をはじめるといった変化も起きている。マーゲイトでは、こうした施設が他にも幾つか生まれている。6つのアート団体が連携して、アーティスト・イン・レジデンスを実施し、マーゲイトにおけるアーティストの活動を支えることも行っている。

ジェントリフィケーションの問題は英国各地で起きているが、マーゲイトの家賃は今のところ安い。しかし、あと3年ほどの猶予だろうとチルコット氏は想定しているようだ。リゾート・スタジオの現在のリース期間は5年間だが、契約更改時には、より長期間の契約ができるビジネスモデルを構築する必要があると考えているという。



リゾート・スタジオは、小規模なクリエイティブ産業が集積するクリエイティブ・ハブである



ロンドンには都市の規模が大きいので、クリエイティブ・ハブに集積するクリエイターも特定分野ごとにまとまりがちだが、ここではさまざまな分野のクリエイターが集まることで多様な分野の情報交換が進み、相乗効果を発揮できる



1階は展覧会や交流・共用のためのスペース 2階以上がスタジオになっている 特に何の広告もなしに年間で2千人以上が来館した 上層階には未利用のままの空間も残っている 自治体の助成金などを獲得しながら、徐々に手を入れてレンタル・スペースを拡げている



ターナー・コンテンポラリーやリゾート・スタジオなどができてクリエイターがロンドンからマーゲイトに戻る変化も起きている

## 2. 欧州文化首都からルーヴル・ランスまでの道程

### (1) 欧州文化首都「リール 2004」

リールはフランス北部にある人口 22 万人の都市で、ベルギーと国境を接するノール＝パ・ド・カレー地域圏の首府であると同時に、ノール県の県庁所在地でもある。

リールは織物産業や機械産業を中心とした工業都市として知られるが、都市としての魅力には乏しかった。一方、1994 年に英仏海峡トンネルが完成、ロンドン、パリ、ブリュッセルを結ぶ高速列車ユーロスターが開通したことで、国際交通ネットワークの要衝となり、街のポテンシャルが強化された。こうした中、リールの政財界は文化の力で都市イメージを向上すべく、2004 年に欧州文化首都を誘致した。欧州文化首都とは、EU が毎年、域内の特定の都市を定めて、さまざまな芸術文化プログラムを 1 年間にわたって開催するもので、欧州文化首都に選ばれることは創造都市のメルクマールの一つといえる。リールは、欧州文化首都の誘致を契機に、文化を活用することで、住民の地域に対する誇りや愛着の回復と、経済的な発展を図ろうとしたのだ。

同友会では 2013 年の欧州視察で、当該年度の欧州文化首都「マルセイユ・プロヴァンス 2013 (MP2013)」の主要会場であったマルセイユやエクス・アン・プロヴァンスを訪ねたが、その際の MP2013 本部へのヒアリングで、「リール 2004」は欧州文化首都の取り組みの成功事例とされていることを知った。このため今回の視察では、欧州文化首都から約 10 年を経たリールの今を確認することとした。

MP2013 はマルセイユ市のみではなく周辺都市を含むマルセイユ・プロヴァンス地方を舞台としていたが、リール 2004 もまたリール市のみではなく周囲の諸都市を巻き込んで事業展開を図ったという。「都市の変身～街に彩りを取り戻す～」のテーマのもとで、会期中に約 2,500 件のプロジェクトが実施され、総来場者数は 900 万人以上に及んだとされる。

こうしたプロジェクトの中で特徴的なものが、リール市をはじめとする域内の 12 の市役所で、ルーヴル美術館などから運んできた作品を展示する事業であった。それまで美術館に関心のなかった市民が作品に接するきっかけになったと評価され、こうした成果が、後述する近隣都市ランス (Lens) へのルーヴル美術館分館の誘致につながった。

また、リールには以前からリール宮殿美術館というフランス国内でも有数の規模を誇る美術館があったが、そうした既存の文化施設に加えて、工場跡地などを活用した芸術創作活動拠点「メゾン・フォリ (熱狂の家)」を州内に 12 ヶ所設け、アート NPO の活動を支援した。このメゾン・フォリは現在も、ビール工場跡を改装したメゾン・フォリ・ムラン、繊維工場跡を改装したメゾン・フォリ・ワゼンムなどが運営を続けている。

### (2) 欧州文化首都以降の継続的取り組み

リールでは、2004 年の欧州文化首都を一過性のイベントに終わらせないよう、リール 3000 という NPO を設立し、2 年に一度のビエンナーレ方式で文化イベントを開催している。リール 3000 の会場の一つとなるのが、使われなくなった古い駅舎を展覧会場や映画館、カフェ、ダンス会場などを併設した総合文化拠点に改修したサン・ソヴール駅舎である。視察時にもこの施設では「アート・ガーデン」という企画展が催されていた。展示会場がテーマパークのようなアート空間に変身し、その中でアーティストのパフォーマンスが繰り広げられていた。

また、リールの市街地各所にはさまざまなパブリックアートが展開し、その作品数は増え続けているようだ。「アート散策 (Parcours Art)」という作品マップによれば、立体作品を中心とした現代アートが 9 点設置され、壁画がまちなかの 26 ヶ所に 35 点描かれている (現代アートと壁画で一部重複あり)。前者のうちでも特に目立っていたのが、ユーロスターの発着するリール・ウーロップ駅前の広場に設置された草間彌生の「ジャングリラのチューリップ」と、旧サン・ソヴール駅舎前の広場に置かれた AES+F 「天使と悪魔のパレード」である。



リールは人口 22 万人の工業都市で魅力には乏しかったがユーロスターが開通したことで、国際交通ネットワークの要衝となり、街のポテンシャルが向上した。更に文化の力で都市イメージを向上すべく 2004 年に欧州文化首都を誘致し、文化を活用することで、住民の地域に対する誇りや愛着の回復と、経済的な発展を図った。リール・ウーロップ駅前広場に草間彌生の「ジャングリラのチューリップ」を設置

### (3) ルーヴル・ランス

ランス (Lens) は、リールと同じノール＝パ・ド・カレー地域圏に属する人口 4 万人の小都市である。すでに述べたように、パリのルーヴル美術館の分館、ルーヴル・ランスが 2012 年 12 月にこの街にオープンしている。設計者は、妹島和世と西沢立衛による日本の建築家ユニット SANAA である。2012 年に同友会で視察したポンピドゥー・センター・メス (坂茂設計、2010 年開館) と同じく、パリに偏在するフランス芸術文化の脱中心化戦略の一環といえる。

SANAA は、1 階建ての 5 つの棟が合わさった、シンプルな形態ながら透明感あふれる美術館を設計した。上から見ると、5 棟のうち中央に位置するエントランス棟のみ正方形で、他の展示棟は長方形である。建物にはガラスやアルミニウム、コンクリートといった比較的ローコストな建築資材を用いているが、アルミの壁面に周囲の風景が映ることで美術館は周囲の風景の中に溶け込み、大きな建造物であるにもかかわらず、威圧感がない。長方形の一番大きな展示棟は「時のギャラリー」と名づけられ、長さ 130m の広大なスペースに、パリのルーヴル本館が収蔵している紀元前 3,500 年頃から 19 世紀半ばまでの名品が年代順に展示されている。

ポンピドゥー・センター・メスと同じく自前のコレクションは持たないが、メスの展示が企画展中心であったのに比べると、ランスの場合、展示替えは定期的に行われるのだが、全ての作品が一斉に替わるわけではないため、半ば常設展のようなイメージが強い。

ランスはかつて炭鉱の街として繁栄したが、1960 年代に炭鉱が閉山したことで活気が失われていた。ルーヴル・ランスの建つ広大な敷地も炭鉱跡地である。こうした中でランスは、ルーヴル美術館の分館を誘致することで文化や観光の振興を通じた地域活性化を目指したのだ。ルーヴル・ランスの開館により、この地域を訪れる観光客が増加し、ホテルやレストランがオープンするとともに、住民の誇りが生まれるなどの効果がランスにもたらされた。

ルーヴル・ランスの運営組織は、法律に基づく文化協力公施設法人 (Établissements publics de coopération culturelle=EPCC) で、地域圏、県、ルーヴル美術館、国が構成主体となっている。また、ルーヴル分館の誘致を契機に地元では、自治体、経済界などが中心となってその効果を地域全体に波及させるための NPO ユーラランス (EURALENS) を設立した。ルーヴル・ランスが文化振興を担う一方で、ユーラランスは、ルーヴル・ランスによる地域ポテンシャル向上を活かし、企業誘致やクリエイティブ産業振興などに取り組んでいる。



ランスはかつて炭鉱の街として繁栄したが、1960 年代に炭鉱が閉山したことで活気が失われた。ランスは炭鉱跡地にルーヴル美術館の分館を誘致することで文化や観光の振興を通じた地域活性化を目指した。美術館の開館により観光客が増加し、ホテルやレストランがオープンするとともに、住民の誇りが生まれるなどの効果もたらされた。



2012 年 12 月にオープンしたルーヴル・ランスの設計者は、妹島和世と西沢立衛による日本の建築家ユニット SANAA である。建物にはガラスやアルミニウム、コンクリートといった比較的ローコストな建築資材を用いているが、アルミの壁面に周囲の風景が映ることで美術館は周囲の風景の中に溶け込み、大きな建造物であるにもかかわらず、威圧感がない。



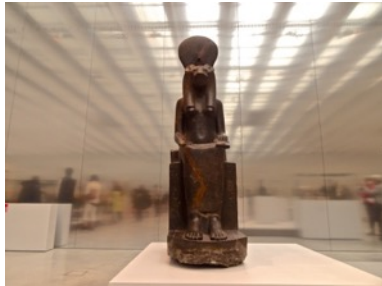
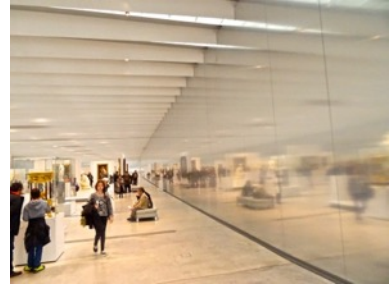
内部もガラスやアルミニウムで外部と溶け込む



展示はITを駆使している



別棟ではレストランも営業している



展示室内ではアルミニウムの無窓壁面は面白い効果を生む。展示室や作品、鑑賞者を曖昧な光で反射することで無限の広がりを生むと共に作品を際立たせる

### 3. フォンダシオン・ルイ・ヴィトン

フォンダシオン・ルイ・ヴィトン（ルイ・ヴィトン財団美術館）は、パリ郊外のブローニュの森にあるアクリマタシオン公園（Jardin d'Acclimatation）の一角に2014年10月に開館した新しい美術館である。

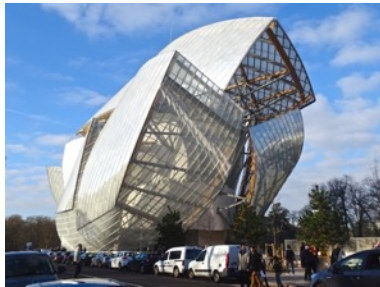
シャンゼリゼのルイ・ヴィトン本店や、わが国のルイ・ヴィトン表参道ビルの最上階にギャラリーが併設されているように、LVMH（モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン）グループは、フランスおよび世界における現代アートの普及・推進に20年以上前から取り組んできた。こうしたメセナ活動の延長線上に、LVMHグループCEOのバルナール・アルノーは、2006年にルイ・ヴィトン財団を創設し、財団の名を冠する美術館の建設を進めた。

フォンダシオン・ルイ・ヴィトンの設計を担当したのは、アメリカ人建築家フランク・ゲーリー。2012年の同友会視察で訪れたビルバオ・グッゲンハイム美術館をはじめ、個性的な建築で知られる建築家である。フォンダシオン・ルイ・ヴィトンもまた、きわめて独創的な形状をしている。ゲーリーの構想は、風をはらんだ帆や、冰山を思わせるものであった。19世紀末に流行したガラス建築からも着想を得たという。こうして完成した美術館は、11室のギャラリーと360～1,000人の収容が可能なホールを擁する延床面積1万1千㎡の空間を、3,600枚のガラスを使用した12枚の巨大な“帆”が覆う複雑な構造を持つものとなった。ゲーリーとしてはガラスを多用することで、流れる雲や風を受ける帆船を思わせる躍動感を美術館に持たせ、森や庭園に囲まれた自然環境に溶け込む効果を狙ったようだ。

もっとも、美術館自体が巨大なことに加えて、ガラスの帆がブローニュの森の樹高を超えて屹立するため、遠方から眺めても目立つことは目立つ。このため景観論争を惹起し、開館には長期間を要したという。とはいえ、一口にブローニュの森といっても、美術館が立地するアクリマタシオン公園は単なる自然公園ではなく、一種の遊園地として整備されている。ナポレオン三世とウジェニー皇后によって1860年に設立された公園には、多種

多彩な異国の動植物を集めた動物園、水族館、温室が設けられ、当初から異世界の文物を展示するエキゾティッ  
クな土地柄であったようなのだ。今日でも動物園や農園、アトラクション、ゲームセンターなどがあり、さら  
にはレプリカの韓国式庭園まで設けられるなど、ある種キッチュな娯楽空間となっていて、異質な文化を受容しや  
すい環境にあるともいえよう。こうした歴史的背景を踏まえると、意外に短期間でパリ市民がなじんでしまう可  
能性もあるかもしれない。

視察当時は、オラファー・エリアソンなどによる常設のコミッションワークの展示に加えて、開館記念展の第  
3段「情熱への鍵 (Keys to a Passion)」が催されていた。モンドリアン、マレーヴィチ、ロスコ、ドローネー、  
レジェ、ピカビア、ムンク、ディクス、ジャコメッティ、マティス、クプカ、セヴェリーニなど、20世紀の美術  
史の流れを変え、モダニズムを築き上げた著名な作品が多数展示された特別展であった。

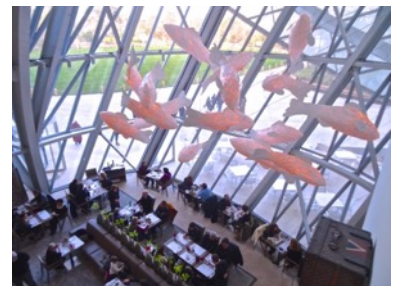


フランク・ゲーリーの設計したフォンダシオン・ルイ・ヴィトン (ルイ・ヴィトン財団美術館) は、パリ郊外のブローニュの森にあるアクリ  
マタシオン公園 (Jardin d'Acclimatation) の一角に2014年10月に開館した新しい美術館



美術館の外部は回廊ようになっており外圍を巡ることができる

ブローニュの森を見渡せる



景観論争されたアクリマタシオン公園の風景にも馴染みつつある

1階のアトリウムに展示されたアート作品

レストラン・ル・フランクにはフランク・ゲーリーのアート作品が展示



オラファー・エリアソンなどによる常設の大型コミッションワークの展示は美術館の大きな魅力

## 4. LRT が走る世界遺産の街 ランス

ランス (Reims) は、フランス北部シャンパーニュ＝アルデンヌ地域圏マルヌ県に位置する。人口は 18 万人で、地域圏で最大の都市である。

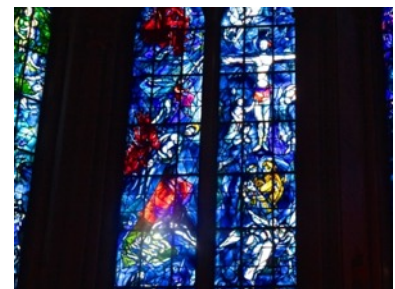
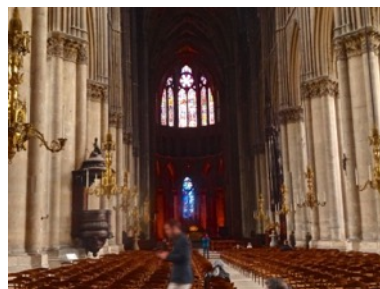
ノートルダム大聖堂、トー宮殿、サン・レミ・バジリカ聖堂の三つが世界文化遺産に登録されているが、そうした中世から続く古い街並みの中に、比較的新しい文化資源が魅力を付加することで、多くの観光客を惹きつけている。例えば、ランスの大聖堂が着工されたのは 13 世紀であるが、そこに飾られたステンドグラスは、マルク・シャガール (1887～1985) が制作したものである。ゴシック建築が醸し出す重厚な雰囲気と、シャガールの現代的で鮮やかなセンスが混じりあい、大聖堂を普遍的であると同時に独創的な魅惑の空間としている。大聖堂から 1km ほどの距離には、フジタ礼拝堂がある。画家の藤田嗣治 (1886～1968) が晩年、シャンパンで有名なマム社の支援を受けて建てたもので、堂内の壁一面に彼の手になるフレスコ画が描かれている。

また、ランスでは 2011 年 4 月に LRT (次世代型路面電車) が開業した。通常の LRT は路上に架線と架線柱が露出するが、ランスの旧市街ではそれらが見あたらない。都心部の 6 駅の区間で、地中に埋めた架線から電力を供給する APS 方式が、ボルドーに続いて導入されたのだ。世界遺産の街並みに配慮しながら、最新のテクノロジーを駆使して新たな都市景観を創出している。

そして、ランスを語る場合に欠くことができないのは、この街がシャンパン醸造の一大中心地であるという点であろう。原産地統制呼称 (Appellation d'Origine Contrôlée=AOC) に基づき、世界中の発泡ワインの中でシャンパンを名乗れるのは、この地域だけである。今回の視察では、テタンジェとヴーヴ・クリコの二つのシャンパン・メゾンを見学することができた。テタンジェのシャンパン・メゾンは、石灰石を切り出した後にできた地下洞に設けられている。過去には、キリスト教徒が迫害を逃れるための隠れ家や、修道院の地下礼拝堂となった場所であり、13 世紀になってベネディクト派の修道士がシャンパンの貯蔵庫に活用するようになったという。そうした長い歴史を持つ一方、テタンジェは、ボトルのデザインをラウシェンバーグらアーティストに依頼するなど、現代アートとの融合にも貪欲である。

ヴーヴ・クリコのシャンパン・メゾンもテタンジェ同様、地下の石切場跡がシャンパンの貯蔵庫になっている。こうした貯蔵方式は、ランスではごく一般的なようだ。そして、ヴーヴ・クリコの場合、メゾン見学後に訪れたショップが非常に充実していた。シャンパンを購入できるのは当然だが、それ以外にデザイン・センスあふれるオリジナル・グッズが多数販売されているのだ。

ランスの観光地としての強みは、歴史的な街並みと現代的な魅力を調和させつつ、シャンパンを圧倒的なキラーコンテンツとして打ち出した点にあると感じた。芸術文化の創造性を地方創生に活かすうえでは、芸術文化を広い意味で捉えながら、同時に、新しい角度からその魅力を磨き上げていくことが重要であろう。そうした中では、例えば食文化 (ガストロノミー) の振興は重要なテーマであると感じる。食文化はユネスコ創造都市ネットワークの 7 分野の一つでもある。同友会として今後、食文化の振興を通じた地方創生のあり方について調査研究を深めていくことも重要ではないだろうか。



ランス・ノートルダム大聖堂はユネスコ世界遺産に登録されている ステンドグラスは、マルク・シャガールが制作した



フジタ礼拝堂 画家の藤田嗣治が晩年シャンパンで有名なマム社の支援を受けて建てたもので、堂内の壁一面にフレスコ画が描かれている

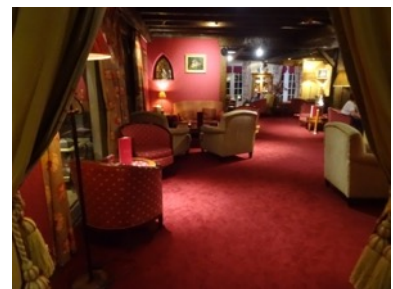




シャンパン・メゾンのテタンジェは、ローマ時代の地下石切場跡がシャンパンの貯蔵庫 過去キリスト教徒が迫害を逃れるための隠れ家や修道院の地下礼拝堂となった場所で、13世紀に修道士がシャンパンの貯蔵庫に活用するようになったという アートボトルも有名



ヴーヴ・クリコのシャンパン・メゾンもテタンジェ同様、地下の石切場跡がシャンパンの貯蔵庫 デザイン・センスあふれるオリジナル・グッズが多数販売されている



ランス近郊のオーベルジュ（地方にある宿泊設備を備えたレストラン）に宿泊 趣味の良い施設とシャンパンに最適な食事はすばらしい



シャンパーニュ地方には、小さなシャンパン・メゾンがたくさんある

ランスのLRTは2011年開業 郊外はバンタグラフで架線から給電されて走るが、街中や景観的配慮が必要な場所は路面より給電される（視察を行ったボルドーと同様の方式）



架線がないLRTはランス大聖堂の景観への配慮になるばかりか、むしろ良い景観を生む効果もある

街中はLRTやタクシー、バスのみ通行可能なトランジットモールとなっており、歩行者によるにぎわいが目立つ

LRTには自転車も持ち込み可能

<その他>



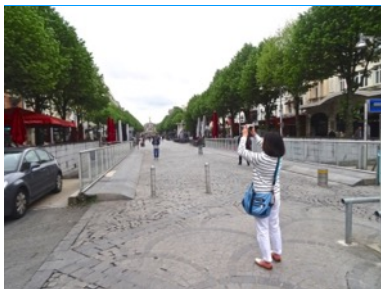
ランス駅前広場は、駅前を横切る幹線道路をアンダーパスさせることで景観の潤いを増している



ランスのBRT (バス・ラビッド・トランジット:バス高速輸送システム) でスムーズな運行



ランスの中心部道路の一部エリアは歩行者専用となっており、道路地下は駐車場になっている



ライジングボラードで車両進入を管理



ユーロスターで英仏海峡トンネル (全長: 50.49km、海底部長: 37.9km、水深: 60m) を渡る この区間は最高速度 300Km で走行しロンドン・パリ間を 2 時間 15 分で結ぶ 車の場合は英仏海峡トンネルをカートレインで利用しイギリスのフォークストンとフランスのカレー間を 30 分ほどで運行している



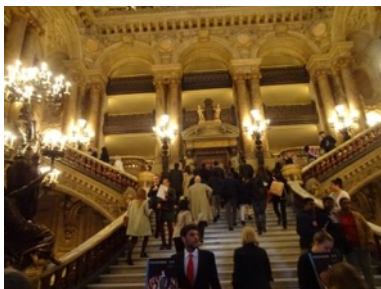
この区間は 160km に速度を落とすが、他の



ロンドンでは人の集まるホテルのことをハブ・ホテルと呼び人気がある クリエイティブ・ハブのように人が出会うことでシナジー効果を期待しているのかもしれない 我々は人気のハブ・ホテル、ロンドンエディションに宿泊した このレストランはロンドンで予約を取りにくいことで有名



パリではオペラ座 (ガルニエ) でバレエを鑑賞した 欧州の文化の懐の深さを痛感した



## おわりに

今回の視察では、特にロンドン五輪の文化プログラム、アーツカウンシル、クリエイティブ経済を中心に視察を行うとともに、英仏各地における多様なかたちの地方創生のあり方を見聞した。こうした成果を踏まえて、同友会は2015年7月に「芸術文化の創造性を活かした地方創生大分モデルの提言」を大分県、大分市、別府市に提出した。その中で、県や各市町村における創造都市、創造農村と地方創生が一体となった政策推進や、2020年に向けた芸術文化・スポーツ・観光一体の取り組みを図ることを提言した。そして、そのための推進基盤として、さまざまな政策分野の課題の創造的解決に向け、行政のパートナーとなるNPOなどの育成支援を図る連携・協働プラットフォーム組織（大分版アーツカウンシル）の設立や、クリエイティブ産業のあり方の検討と創造の場（クリエイティブ・ハブ）の実現を求めている。

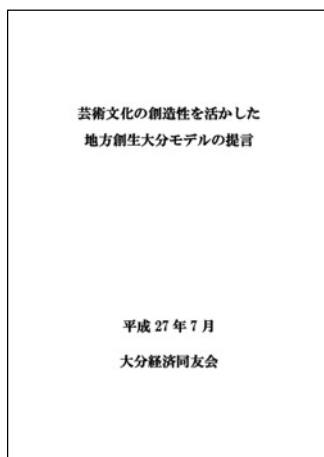
その後、2015年7～9月にかけて、大分県では20年ぶりのDESTINATIONキャンペーンが開催され、OPAM、大分市美術館、おおいとイレンナーレ、混浴温泉世界など多彩な文化プログラムが県民市民や観光客を迎えた。2015年のこうした経験を一過性のものとせず、次年度以降に向けたレガシーとしていくことが重要である。

こうした中、大分県は新長期総合計画「安心・活力・発展プラン2015」を策定し、芸術文化による創造県おおいとの推進を政策に掲げ、東京五輪に向けた文化プログラムの推進、芸術文化の持つ創造性を活用した社会的、経済的な課題への対応に取り組むことを決めた。その中で、大分版アーツカウンシル構築のあり方についても検討を進めていく。さらに、クリエイティブ産業への挑戦を掲げ、クリエイティブな人材（アーティスト、IT技術者、デザイナー、起業家など）とのネットワーク構築や、県内企業と創造的人材との交流の場の創出、付加価値の高い新事業の創出を目指して、具体的な検討に入った。

大分市も新総合計画を策定し、大分市固有の文化・芸術などの創造性を高め、地域振興や産業振興に領域横断的に活用する創造都市を目指すことにより、文化、社会、経済など多方面に相乗効果を生み、大分市全体の活性化へとつなげていくことを掲げた。そのために、大分市の魅力ある文化・芸術資源を教育や観光・産業など幅広い分野へ活用していくことや、インキュベーション機能の充実を通じて成長が期待される産業や都市型産業への支援を行っていくことを謳っている。

さらに別府市も、まち・ひと・しごと創生別府市総合戦略「まちをまもり、まちをつくる。べっふ未来共創戦略」に、別府発の芸術家育成や、アートがあふれるまちづくり、図書館・美術館の一体整備を掲げた。

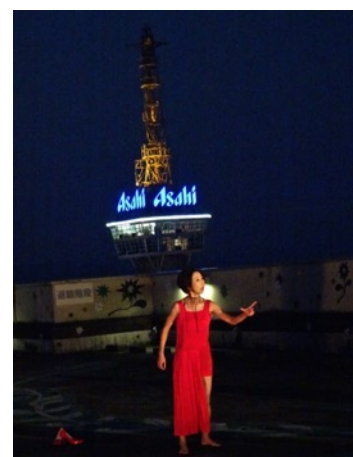
このように、大分県、大分市、別府市、さらには県内の各地域において、芸術文化の創造性を活かした地方創生の取り組みが、次のステップへと進もうとしている。2020年に向けて「創造県おおいと」の実現を図っていくうえで、今回の視察報告書が何らかの参考となれば幸いである。



大分経済同友会は2015年7月「芸術文化の創造性を活かした地方創生大分モデルの提言」を大分県、大分市、別府市に提出  
<http://www.oita-doyukai.jp>



大分県は新長期総合計画「安心・活力・発展プラン2015」を策定し、芸術文化による創造県おおいとの推進を政策に掲げた  
<http://www.pref.oita.jp/soshiki/10111/oita-plan2015.html>



DESTINATIONキャンペーン期間中、混浴温泉世界2015やおおいとイレンナーレ、トレインナーレなどが開催された

## 参考資料1 視察スケジュール

視察日程 2015年5月1日(金)～5月10日(日)

### 1. ランス(Reims)視察(フランス)

日程: 2015年5月2日

訪問先: 旧市街(ノートルダム大聖堂、フジタ礼拝堂、LRT)、シャンパン・メゾン(テタンジェ、ヴーヴ・クリコ)

対応者: 現地ガイド

### 2. ランス(Lens)・リール視察(フランス)

日程: 2015年5月3日

訪問先: 【ランス】ルーヴル・ランス

【リール】旧市街(ド・ゴール將軍広場、リール宮殿美術館)、メゾン・フォリ・ムラン、サン・ソヴェル駅舎、市街地パブリックアート群

対応者: 現地ガイド

### 3. ロンドン・マーゲイト視察(イギリス)

日程: 2015年5月4～7日(7日はパリへの移動行程)

#### 5月4日

訪問先: 【ロンドン】デザイン・ミュージアム、テート・ブリテン、テート・モダン

対応者: 現地ガイド

#### 5月5日

訪問先: 【マーゲイト】ターナー・コンテンポラリー、旧市街(オールド・タウン)、リゾート・スタジオ

【ロンドン】ニューアム・ロンドン特別区 区役所、クイーン・エリザベス・オリンピック・パーク

対応者: 【マーゲイト】ターナー・コンテンポラリー 学習・来館者体験部門ヘッド カレン・エスリー(Karen Eslea)氏、企業・経理部門ヘッド サマンサ・ロイド(Samantha Lloyd)氏  
アーツワーク 戦略マネージャー ルーシー・メドハースト(Lucy Medhurst)氏  
サネット区 観光マネージャー ポーラ・ハービッジ(Paula Harbidge)氏  
リゾート・スタジオ ダン・チルコット(Dan Chilcott)氏

【ロンドン】ニューアム・ロンドン特別区 区役所 ジョン・カウ(John Couch)氏、スー・マイナーズ(Sue Meiners)氏

#### 5月6日

訪問先: 【ロンドン】ブリティッシュ・カウンシル、トランペリー・オールド・ストリート、アーツカウンシル・イングランド

対応者: 【ロンドン】ブリティッシュ・カウンシル クリエイティブ経済チーム 中東・北アフリカ・東アジア地域担当マネージャー レベッカ・シューズミス(Rebecca Shoesmith)氏

キングス・カレッジ・ロンドン カルチャー・アット・キングス 文化調査プロジェクト・マネージャー ウルリカ・ホグバーグ(Ulrika Hogberg)氏

トランペリー 代表 チャールズ・アームストロング(Charles Armstrong)氏

アーツカウンシル・イングランド 国際部門ディレクター ニック・マクドウェル(Nick McDowell)氏、同上シニア・マネージャー ニコラ・スミス(Nicola Smyth)氏

### 4. パリ視察(フランス)

日程: 2015年5月8～9日

訪問先: フォンダシオン・ルイ・ヴィトン(ルイ・ヴィトン財団美術館)、旧市街

対応者: 現地ガイド

## 参考資料2 視察参加者名簿

※順不同・敬称略、役職は視察当時のもの

氏名	役職
団長 福島 知克	大分瓦斯(株) 代表取締役社長
尾野 文俊	鬼塚電気工事(株) 代表取締役社長
荒木 慎二	(株)エーワン 代表取締役
荒木 淳子	同夫人
川野 みどり	大分ファミリー(株) 代表取締役社長
小手川 強二	フンドーキン醤油(株) 代表取締役社長
小手川 映子	同夫人
高原 一誠	府内産業(株) 代表取締役
高原 田鶴子	同夫人
中山 欽吾	公立大学法人大分県立芸術文化短期大学 理事長・学長
中山 恭子	同夫人
三浦 宏樹	(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団 参与
水江 浩一	(株)水江商店 代表取締役社長
水江 美砂	同夫人
宮坂 純子	全日本空輸(株) 大分支店 支店長
宮内 裕和	府内産業(株) 顧問
佐野 真紀子	(株)日本政策投資銀行 大分事務所 副調査役
山出 淳也	NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事
松田 雅代	NPO 法人 BEPPU PROJECT
添乗員 藺田 花奈	(株)JTB九州 大分支店
広瀬 勝貞	大分県 知事
広瀬 堯子	同夫人

※ 県知事夫妻は、英国視察の行程のみ個人参加



## 参考資料3 主要参考文献

- アーツカウンシル東京 2013 『オープン・フォーラム「日本におけるアーツカウンシルの役割を考える」報告書』
- 大分経済同友会 2010 『提言 県都大分の交通体系について』
- 大分経済同友会 2011a 『フランス・ドイツ経済事情視察報告書 ～交通とアートのまちづくりを考える～』
- 大分経済同友会 2011b 『提言 県立美術館整備の方向性 ～クリエイティブな美術館&都市づくりに向けて～』
- 大分経済同友会 2011c 『提言 県立美術館整備の方向性II ～創造都市実現のための処方箋～』
- 大分経済同友会 2012 『提言 大分都心南北軸整備の方向性について ～アートと交通のまちづくりに向けて～』
- 大分経済同友会 2013 『欧州アート・交通まちづくり視察報告書 ～創造都市に大分の未来を見る～』
- 大分経済同友会 2014a 『スペイン・フランス・アートとまちづくり視察報告書 ～アート県 大分を目指して～』
- 大分経済同友会 2014b 『提言 クリエイティブ大分を目指して ～長期ヴィジョンと、2015年に向けた戦略の必要性～』
- 大分経済同友会 2015 『芸術文化の創造性を活かした地方創生大分モデルの提言』
- 太下義之 2014 「国際的な文化事業による創造的な都市・地域整備に関する研究～「欧州文化首都」から「東アジア文化都市」へ～」（三菱UFJリサーチ&コンサルティング『季刊 政策・経営研究 2014 vol.2』）
- 太下義之 2015 「オリンピック文化プログラムに関する研究および「地域版アーツカウンシル」の提言」（三菱UFJリサーチ&コンサルティング『季刊 政策・経営研究 2015 vol.2・3』）
- 喜多功彦 2015 『五輪を楽しむまちづくり ロンドンから東京へ』（鹿島出版会）
- 自治体国際化協会 2013 『ロンドン事務所マンスリートピック（2013年12月）【政府の支援で経済振興が図られているロンドン内の地区について～テクノロジー産業の集積地「テック・シティ」など】』
- 自治体国際化協会 2014 『Clair Report No.402 2012年ロンドンオリンピック・レガシーの概要』
- テレザ・スミス 2011 「イングランド南東沿岸部の都市におけるアートと地域再生 —アートと社会サービスによる地域再生に関する現地調査（2010年10月25日～29日）最終報告書—」
- 野村総合研究所 2011 『平成23年度知的財産権ワーキング・グループ等侵害対策強化事業（クリエイティブ産業に係る知的財産権等の侵害実態調査及び創作環境等の整備のための調査）報告書』
- 萩原雅也 2014 『創造の場から創造のまちへ』水曜社
- 文化庁 2014 「文化芸術立国中期プラン」
- 文化庁 2015a 「文化芸術の振興に関する基本的な方針—文化芸術資源で未来をつくる—（第4次基本方針）」
- 文化庁 2015b 「文化プログラムの実施に向けた文化庁の基本構想～2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とした文化芸術立国の実現のために～」
- 吉本光宏 2012 「文化の祭典、ロンドンオリンピック——東京オリンピック2020に向けて」（ニッセイ基礎研究所『ニッセイ基礎研レポート 2012-09-05』）
- 吉本光宏 2015 「地域アーツカウンシル——その現状と展望」（ニッセイ基礎研究所『ニッセイ基礎研レポート 2015-05-29』）
- マーティン・ミローン 本田和美翻訳 2002 『Tate Britain 日本語版』Tate Publishing Limited
- Arts Council England 2010 『Achieving Great Art for Everyone A Strategic Framework for the Arts』
- Arts Council England 2013a 『Great Art and Culture for Everyone 10-year Strategic Framework 2010-2020』
- Arts Council England 2013b 『Reflections on the Cultural Olympiad and London 2012 Festival』
- Arts Council England 2014 『Arts Council England Grant-in-Aid and Lottery distribution annual report and accounts 2013/2014』
- Department for Culture, Media and Sport (DCMS) 1998 『Creative Industries Mapping Documents 1998』
- DCMS 2001 『Creative Industries Mapping Documents 2001』
- DCMS 2010 『Creative Industries Economic Estimates — December 2010 (Experimental Statistics)』
- DCMS 2013 『Classifying and Measuring the Creative Industries』
- DCMS 2014 『Creative Industries Economic Estimates — January 2014』
- DCMS 2016 『Creative Industries Economic Estimates — January 2016』
- Foundation Louis Vuitton 2014 『CONNAISSANCE DES arts SPECIAL ISSUE FONDATION LOUIS VUITTON』
- Foundation Louis Vuitton 2015 『CONNAISSANCE DES arts SPECIAL ISSUE FONDATION LOUIS VUITTON KEYS TO PASSION The exhibition of the Fondation Louis Vuitton』
- Master Card 2014 『2014 Global Destination Cities Index』
- National Portrait Gallery Publications 2015 『Van Dyck The Last Self-Portrait』
- Nick Evans 2014 『Dreamland Revived The story Margate's famous amusement park』Bygone Publishing
- Simon Bolitho 2012 『Tate Modern The Guide』Tate Publishing
- Tate 2012 『TATE MODERN THE BUILDING』Tate Publishing
- Victoria Pomery 2013 『Turner Contemporary Our History』Turner Contemporary and Jigsaw Design & Publishing Ltd.
- Xavier Dectot, Vincent Pomarede, Jean-Luc Martinez 2015 『LOUVRE LENS THE GUIDE 2015』Somogy Editions d'Art









問い合わせ先：大分経済同友会  
〒870-0021 大分市府内町3丁目4-20 大分恒和ビル3F  
電話：097-538-1866 E-mail：info@oita-doyukai.jp  
<http://www.oita-doyukai.jp>